獨創
圍碁
一週間速進法

186
248

186-248
120080025868

186-248

五段 鈴木爲次郎 著

獨創圍碁一週間速進法

東京 大阪屋號 斯文館 發行

大正
8. 3. 17
内交

はしがき

古來碁の門に入るは頗る難事であるかの樣に思はれて居たのは一つは其教授法が組織的で無かつたのと今一つは平易に説明し得る處を強いて六ケ敷く説明する傾向があつたからである

本書は之等の缺點を補ふ可く組織的に詳細説明せるものであるから若し之れによりて能く研究したならば一週間を出でずして必ず圍碁の大要を知り以後は何人とも自在に對局し得らるゝ事を保證するのである

附屬の盤面は著者が新案に成れるもので初學者の研究上、最も便利に作製したれば總ての點に於て其理が一目で明白に分ると共に、勝敗の決も早く隨つて初學者をして、忽ち

に習熟せしめ、豐富なる趣味を覺えしめる事が出來るので、眞に碁界の新レコードを作つたものと稱す可きで、又聯珠にも最も妙である。

大正七年八月

編者識

目次

碁に地取りと石提りとあり

目・四つ目殺し　自第一圖至第二圖
切、粘　第三圖
四つ目殺し（其二）　第四圖
征　自第五圖至第七圖
門　第八圖
石の死活　自第九圖至第十一圖
死活の要點　第十二圖
死　自第十三圖至第十五圖
活　自第十六圖至第十八圖
攻合　自第十九圖至第二十三圖
劫　自第二十四圖至第二十六圖
地と駄目の概略　自第二十七圖至第二十九圖

一局の打初めより打終りまで

石の配置　自第三十圖至第三十三圖
死活の練習　自第三十四圖至第三十六圖
終局と作り方　自第三十七圖至第四十一圖

必勢の石配

井目必勝法　自第四十二圖至第四十七圖
四目必勝法　自第四十八圖至第五十三圖
先手必勝法　自第五十四圖至第五十九圖

廣い盤面の打方一例

布石　自第六十圖至第六十二圖
戰爭　自第六十三圖至第六十四圖

獨創圍碁

一週間速進法

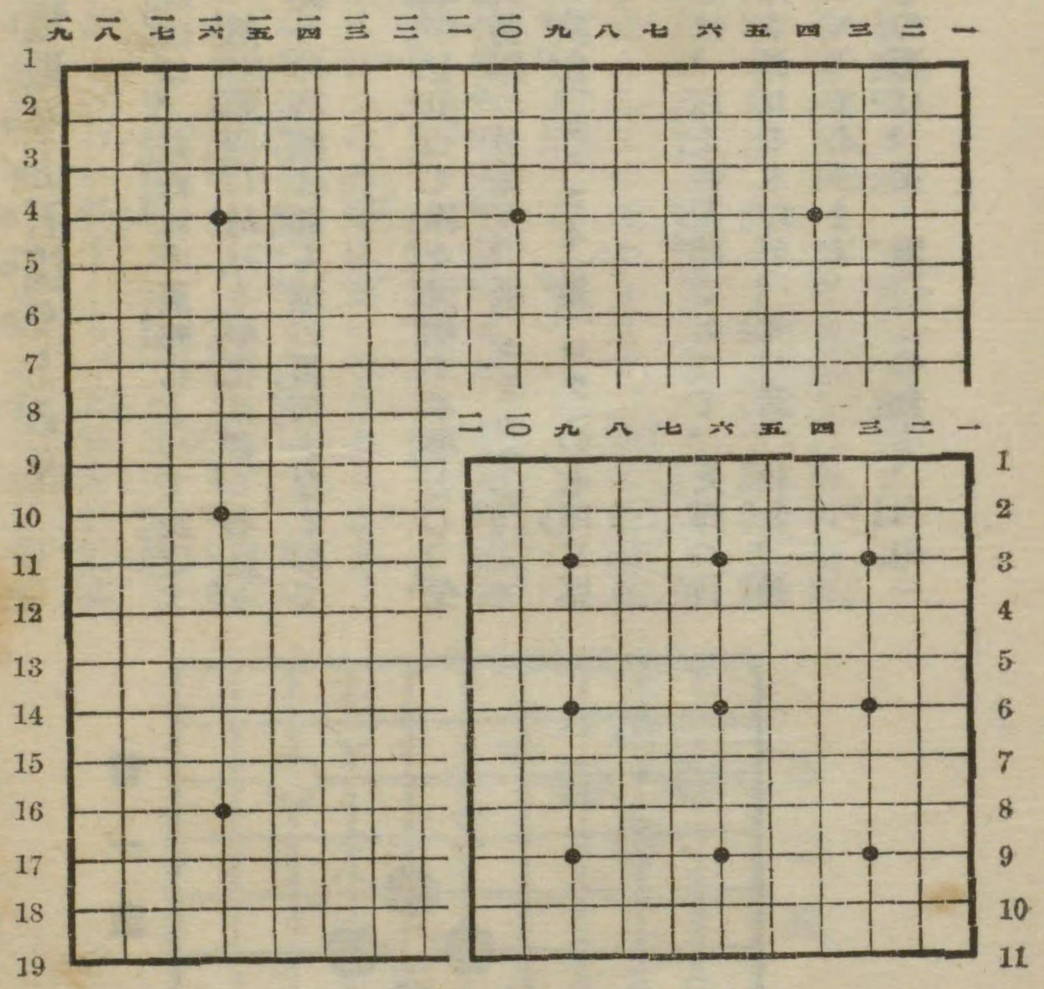
五段 鈴木爲次郎 著

盤面の廣さは、普通左の圖に現はす如く、縱横各々十九線、全面三百六十一路であるが、之れは初心者に取りて廣汎に過ぎ、容易に終局せざる爲めに却て其興味を殺がれる恐れある事は著者の屢々實見せし處であります。

故に圖中に現はす如く、盤面を縱横各十一線、全面百二十一路に改めて、其大要を説明せんとするにあるので、之れは丁度將棋に大將棋、中將棋の別あると同じく、碁を圍むに一つの簡便なる方法であります。

又普通流行する盤面上に於ける變化と、此盤面の變化とは大同小異にして、却て死活の大要を知り、又勝敗の機微を察する點に於て、より以上優越せる事は茲に煩はし説明する迄もありませぬ。

盤面圖



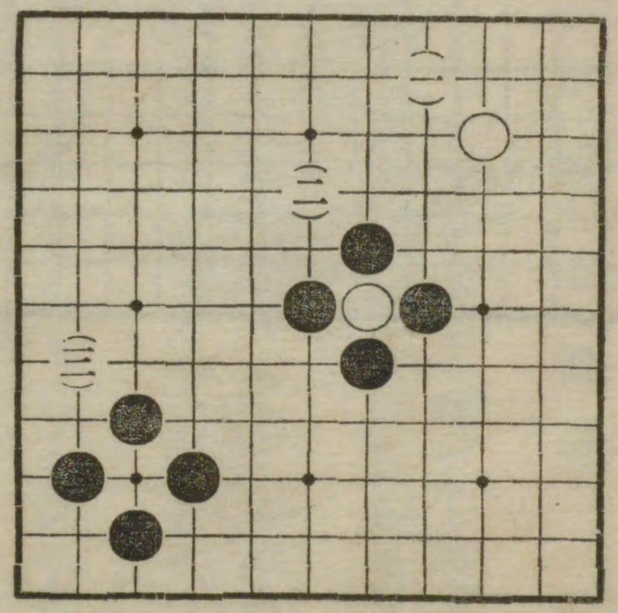
碁に地取りと石提りとあり

第一圖　碁の勝敗は、最終地の廣狹によつて決定するのであるが、然し此間に於ける變化は盡く石提りであつて、石提りの巧拙は卽ち地の廣狹となるのであります。

地取りは以下順序を追つて徐々説明する事とし、先づ石提りは、大要四つ目提り、征(シチヤウ)門(アシダ)死、活、攻合(セメアイ)劫(コウ)の七種に區別されます。

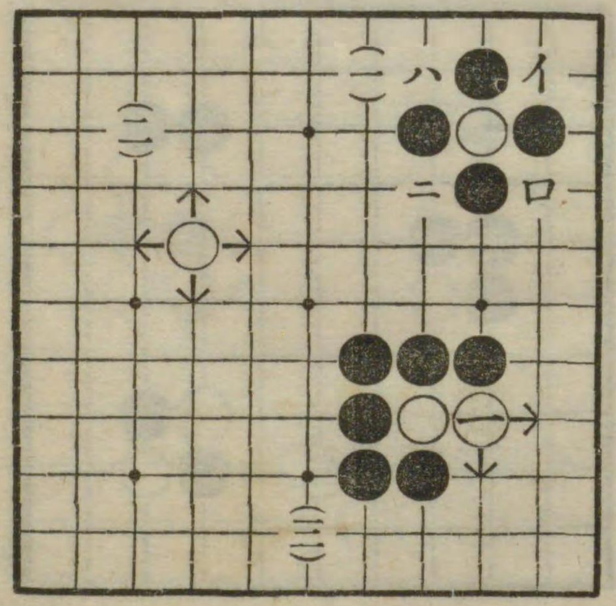
此中四つ目殺しは、以上の基礎であつて、此四つ目殺しの廣く應用されたるものが、死、活、攻合、劫となつて現はるゝのであります。

次に四つ目殺しの形は、第一圖(一)の如く、白の一子盤上にありと假定するに、今此一子を提るには、(二)の如く黑四子を以て其一子の直線上の四方を包圍すれば宜い、斯すれば、白一子は其活動力を殺がれ、之れと同時に(三)の如き形となつて、白一子は盤上より取り去らるゝのであります、卽ち此狀態を指して四つ目殺しと稱へる。



第一圖

第二圖　前の如く其一子を打拔くには、其石の直線上の四方を包圍すれば宜い、二圖(一)の如くイ、ロ、ハ、ニ等斜線上に打つの必要は無いのであります。何故なれば、石は總て其何れにあるを問はず、常に(二)の如く四方に發展する活力を持つて居る、故に其活力を有する四方を圍めば宜い譯で、若し(三)の如く假令多くの石を費すとも、其四方が包圍して無い場合は白に圖の如く一と打たれて猶二個の



第二圖

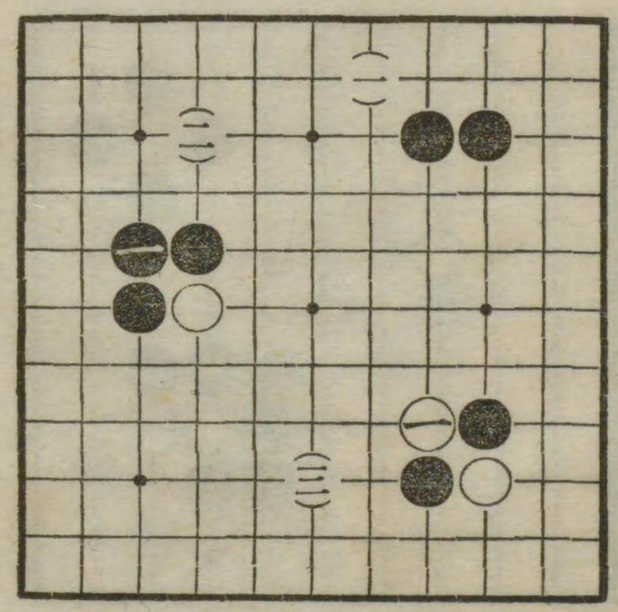
活力を持たれる譯になります

切、粘

第三圖　石は總て四方に發展する活力を持つて居る以上、若しも其活力上の一點へ一子打添へるとすれば(一)の如く此二子は全く同一の石となつて、連續さるゝのであります。

又(二)の如き形に於て、黒一に打とすれば、此一の一子は右にある黒にも連續し、又下の黒にも連續して居るので、此三個の黒は全く同一の石となつたのであります、即ち斯く黒一と打つ如き手、之れを粘と稱へるのであります。

然るに反對に、白より此處に打たれるとすれば(三)の如き形となつて、白、黒共に切斷されたる石となるので之れを切と稱へる。



第三圖

故に直線上に同一の石ある時は連續し、若し斜線上にある時は切斷さるゝ石となる。

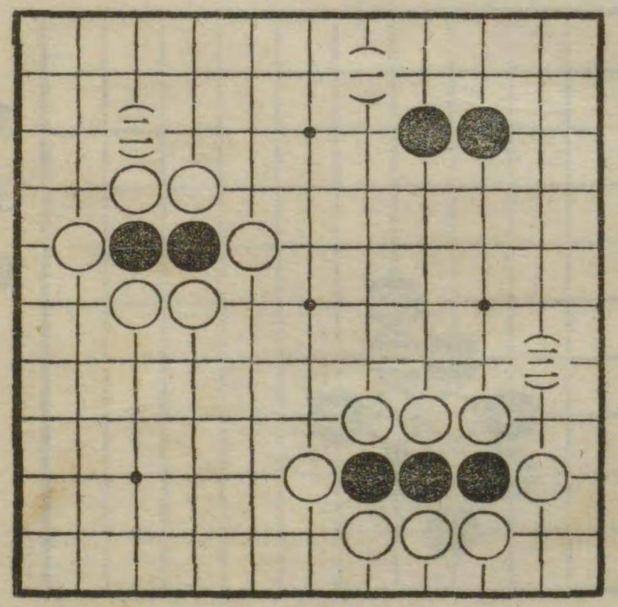
四つ目殺し（其二）

第四圖　一個の石を打拔くの方法は前述の如くであるが、若し之れが連續されたる二個或は夫れ以上の石なる時は如何と云ふに、之れも前と同じ理によつて打拔く事が出來ます。

第四圖(一)黒の二子を提るには(二)の如く其四方を包圍すれば宜い。

又(三)の如く、三個連續せし時も、矢張り其四方を包圍すれば宜い。

此理は假令其石の數が五個、八個或は數十と連續せ

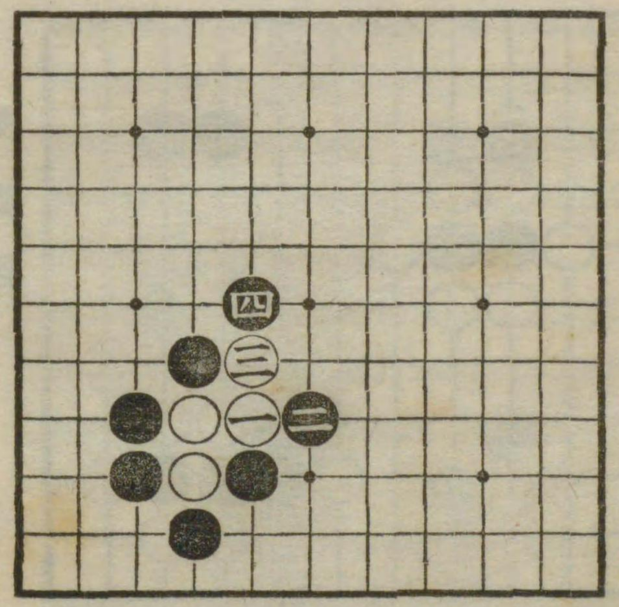


第四圖

し時も、皆盡く其直線上の四方を圍めば直に其石を打拔く事が出來ます。

征

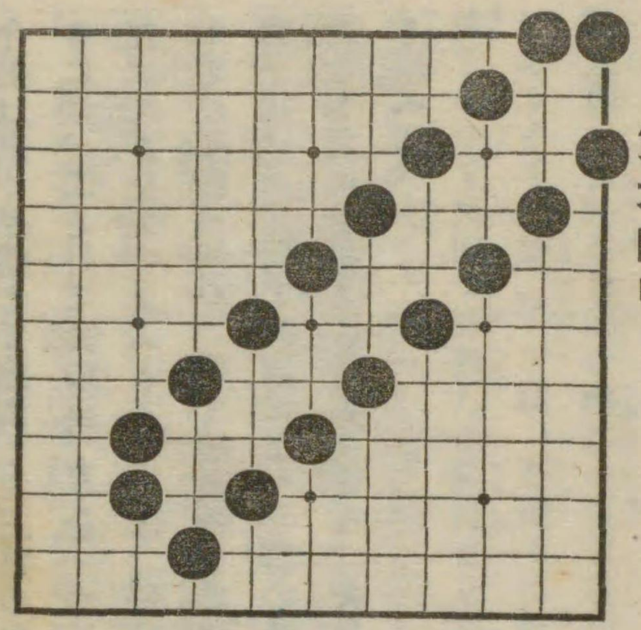
第五圖 實際碁を圍む時往々征となつて現はるゝ形があります、此征とは、石提りに於ける一つの方法であつて又四つ目殺しの變化せし形であります。今第五圖に於て、白一と逃げ出したとするに、(此處で注意す可きは前の四つ目殺しまでは石其ものゝ有りのまゝの形について說明したが、征は碁の變化であつて、假りに白一と打つとすれば次は黑の手番であるから、黑二と打ち、次は白、其次は黑と云ふ樣に、互に交る〴〵着手するので實戰に於ては無論斯くある可きは云ふまでもありませぬ。)



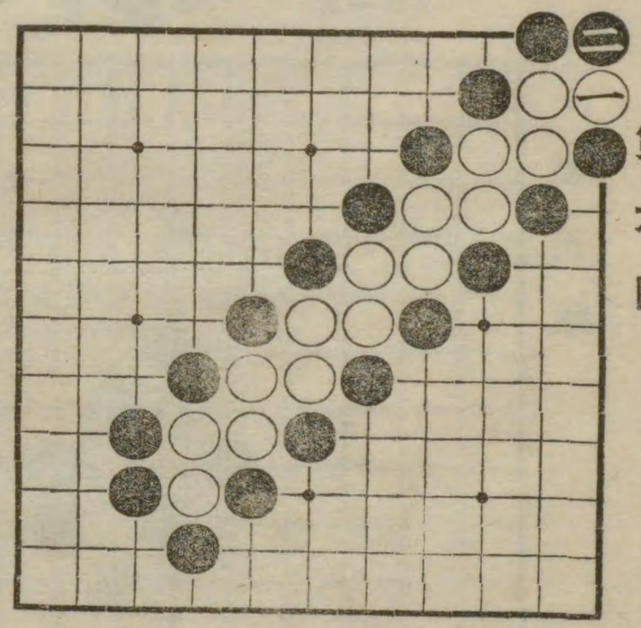
第五圖

今黑は斯く連續して逃出した三目の白を提らふとするには、二と打て白の活力を一つに縮める、此時白は此石を逃げよふとするには、圖の如く三と打つの外に手段は無い、依て黑猶四と其出先きを壓へ、以下は之れと同じ步調によつて盤の最極端まで白を追窮し之れを提るのであります、此狀態を指して征と稱へる。

第六圖 此圖は前の征を盤の極端まで追ひ詰めし形であつて、今此圖に於て白一と逃げし時、黑二と打つて白の活力を盡く減し初めて白の石全部を打拔く事が出來るので卽ち第六圖(甲)の如き形となります。



第六圖甲

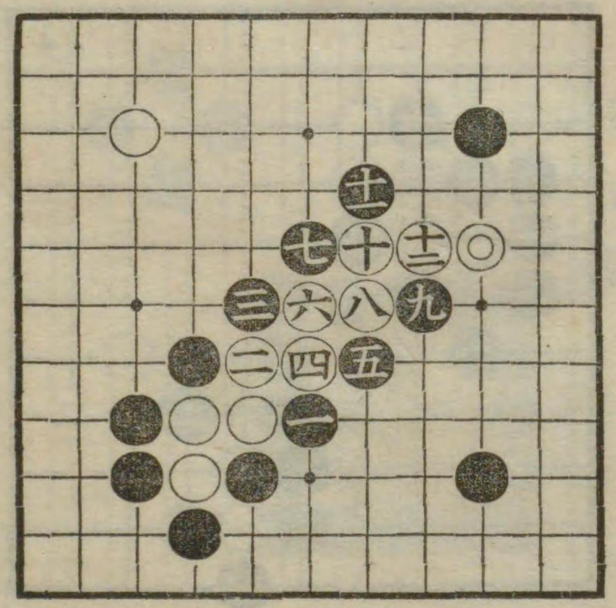


第六圖

第七圖 征クズレ、前の如く征に追ひ、遂に之れを打拔く手段を征にカケルと云ふ、然るに實戰上に於ては、局面は種々變化して限り無きもので、盤面上何處に敵或は味方の石があるかは豫め知る事は出來ぬ。

今七圖の如く、白と黑と互に散在せし局面に於て、若し黑一と打て征に追ふ時は、白二と逃げ以下三、四、五、六、七、八、九、十と征に追ふ中に前方に白◎印の一子ある故に、白は十二と打て此一子に連續するのであります、若しも斯くなる時は、黑は皆切斷さるゝ石となるに反して、白は强力なる一つの石と變ずるので之れを名づけて征クズレと云ふ。

故に征にカケ、之れを打拔く事が出來れば、(前圖の如き形)無論大勝であるが、若し反對に征クズレと



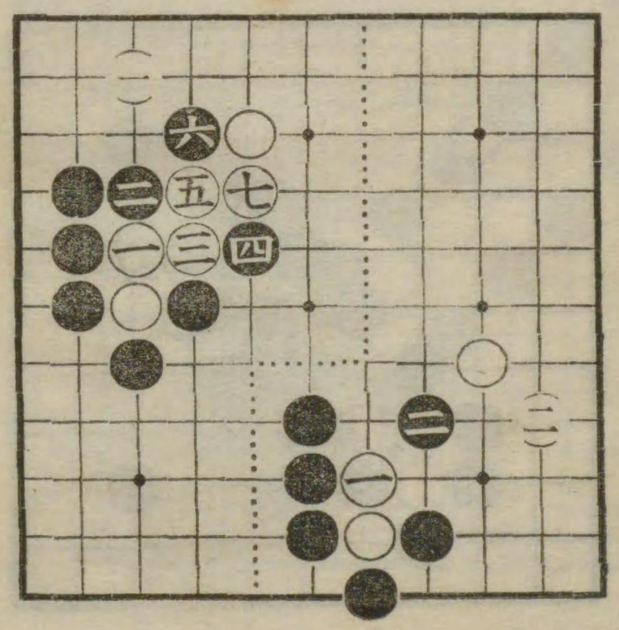
第七圖

なる時は其結果甚だ惡しきは云ふまでも無い。

門

第八圖　前圖の如く征にカケられぬ場合の時門として圍む方法があります。

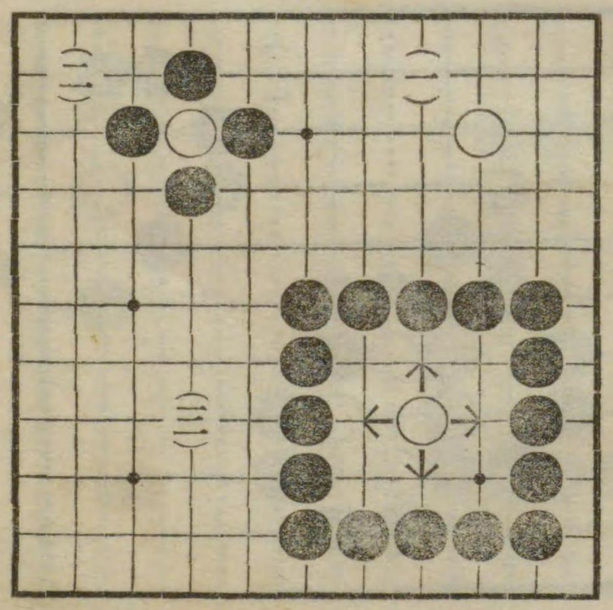
今第八圖（一）の如き形に於て白一と逃出せし時に若し黑二と之れを征に追ふ時は白三と逃げ、黑四白五黑六白七と打て遂に白の石に連續する事となります故に黑は初め白一と逃げ出せし時に（二）の如く、二と掛ける手がある、之れを門と稱へるので、斯く打たれし時白は如何に打つも決して外に逃出す手段は無い。



第八圖

石の死活

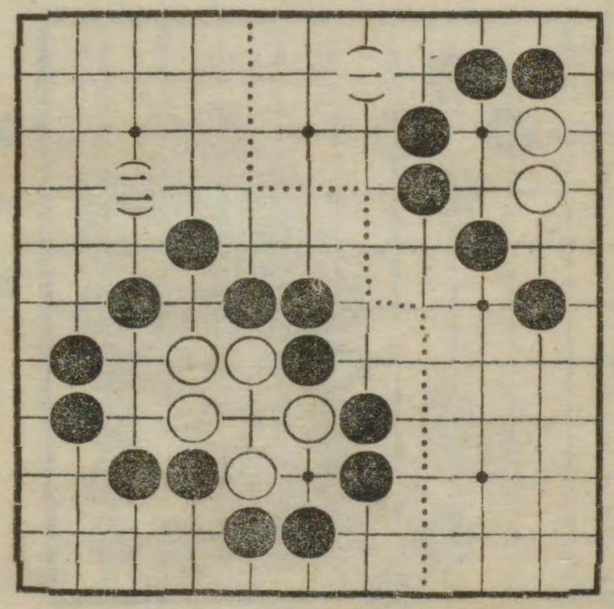
第九圖　石の死活は、實戰上の根本であつて、又最も緊要なる事でありますが然し其形復雜して稍難解の點があるかも知ませぬが、若し此死活の形について充分了解する事が出來れば他は自から明瞭となるのです、假りに（一）の如く白一子があるとする此一子を打拔くには云ふまでもなく（二）の如く打てば宜いのであるが、茲に（三）の如き形に遭遇せしとする此中にある白一子は何んであるかと云ふと、現在の處圖示の如く完全に四個の活力を持つて居る、然し斯く嚴重に四方を包圍せられては到底外に逃出す途もなく結局此石は死と云ふ事となります。



第九圖

第十圖　此圖も只白の石の數が多くなつたと云ふばかりで外には少しも異つた處は無い。

（一）及び（二）の如き斯く包圍されたる、白數子は何れに向つても黒の圍みを破る方法無く從て此白數子は結局死と云ふ事となります。



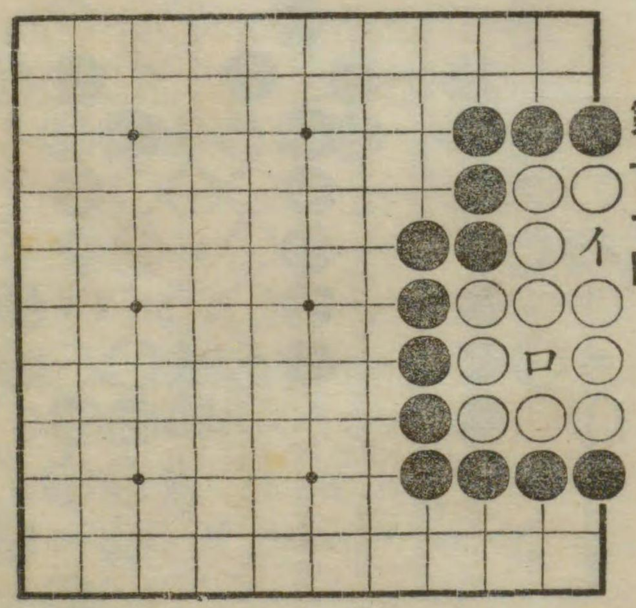
第十圖

第十一圖　然るに茲に第十一圖の如き形に遭遇せしとするに、中の白は全く黒に包圍せられて外に逃出す途は無いが、然し白はイ及びロに二つの活力を持つて居る。

而かも此二つは完全なる活路であつて、少しも黒より侵さるゝ憂いは無い。

若し黒イに打つも、四つ目殺しの理によつて、直ぐ白に此石を提られ、又黒ロに打つも同じく白に提去らるゝのである。

既に圍碁の法則として、二着を連け打つ事を許されぬとすれば、黒は白に向て如何とも取る可き手段は無い、換言すれば黒イとロとの二つの活力を同時に滅しなければ、白の石は打上げられぬので此事を行ふは全く不可能とすれば、從て黒は白に向て手の



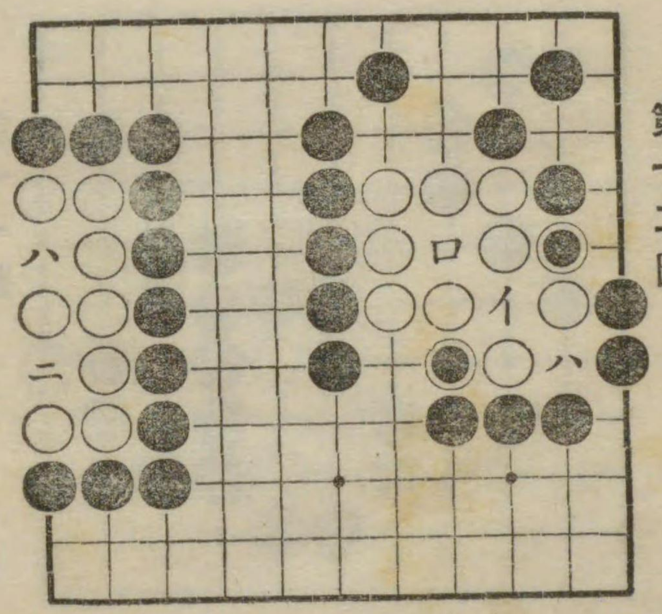
第十一圖

下し樣が無い譯となる。

故に斯の如き形を活と云ひ、如何に局面に大變化を生ずるとも、絶對無限に盤上に生存する資格を有する石となるのであります。

死活の要點

第十二圖　石の死活を知る可き最も必要條件として は、缺眼、一眼、二眼との區別であります、此中缺眼とは、圖中イの如き點を云ひ、ロは完全なる一眼にして、次にハ、ニ及び前圖イ、ロの如きを二眼と云ふ（玆に二眼と稱するは別箇に一眼づゝ有する形を云ふ）此中イの如き、何故に缺眼と名づけるかと云へば、黑に◉印の二子あり、之れによりて、イは其組織に缺點あるが爲めに、黑より若しハと打たる



第十二圖

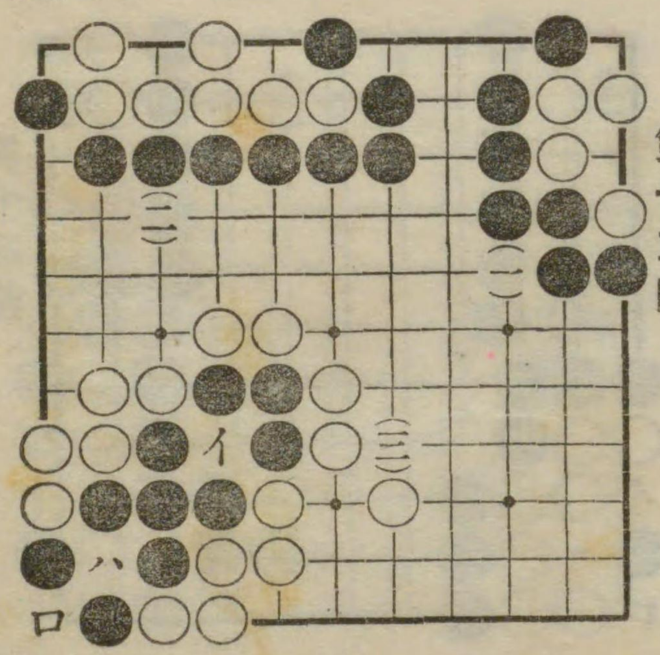
る時は、白の二子は當りとなり、次に猶黑にイと打たるゝ時は、白の二子を打拔かれる事となる故に此イの一點は白より如何にするも到底眼の形を成さぬ處であります。

死

第十三圖　死とは、外面を敵に包圍せられ、且內に完全なる二眼無き時、總て之れを死と稱へるので、此理は前の第九及び第十圖に於て其一端を說明せし如くであります。

缺眼一眼の死、圖中（一）の白四目は缺眼死の形にして（二）の白數子は一眼の死（三）は缺眼イ一眼ロの死となつて居る。

此中（三）の如きは、白イと打つ時は上の黑三目は先



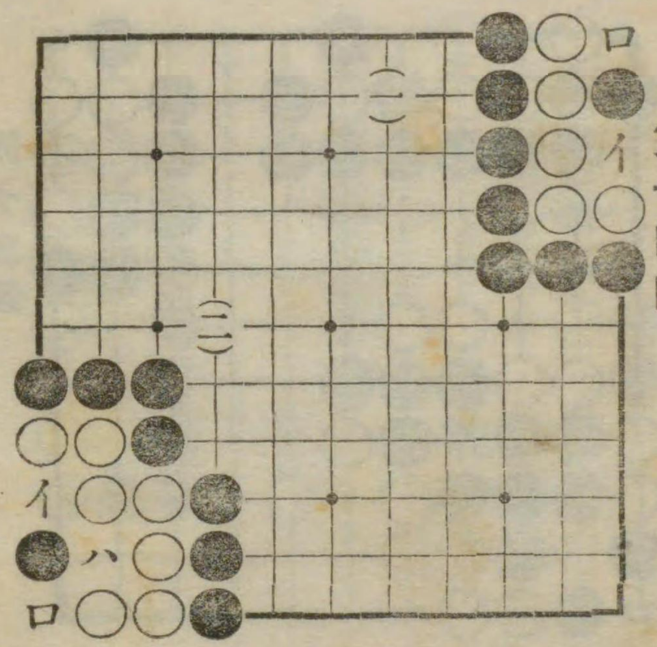
第十三圖

づ打上げられ、次に猶五目の黑が又當りとなつて居る、故にハの如きも亦缺眼と稱するのであります。

第十四圖　死の形（其一）　局面の變化は實に限り無きと等しく、死も亦盤面上種々樣々の形となつて現はるゝのであります。

今二、三の例を示せば（一）中の白は同じく死となつて居る、何故なれば黑より之れを打上げんとするには、黑先づイと打つのである、此イと打つ手は只假定したまでゞあつて、黑は別に斯く打たずとも死であるが、只白を打拔く方法として其提り方を此處に示したまでゞある。

此時白はロと二子を提るの外無く、黑猶イに打込み次に白イの一子を提りし時、黑又イと打て此白全部を打拔く事が出來る。



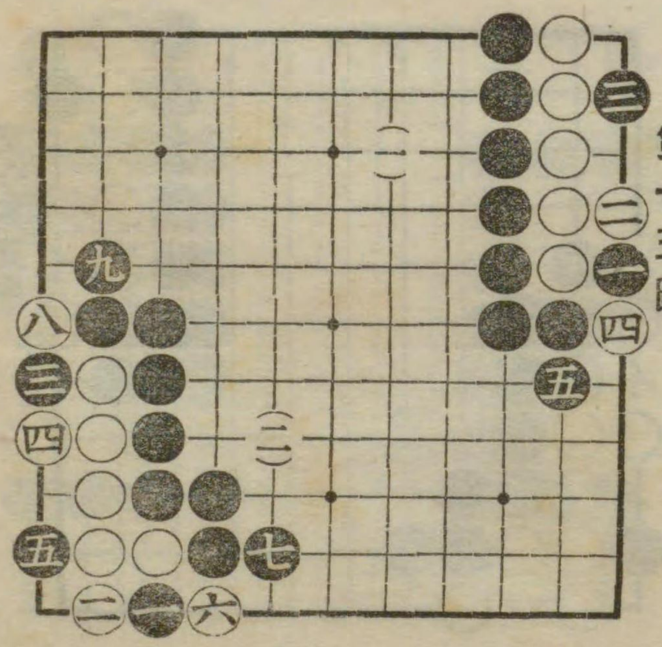
第十四圖

斯く黑よりは自由に此石を提りかけに行く事が出來るが、之れに對して白は如何ともする手段なく、終局遂に敵に打拔かるゝの外は無いのであります。

（二）も同じく白死の形であつて、今之を（一）と比較する時は、只（一）はイ、ロの二點（二）はイ、ロ、ハの三點あるの相違のみにして、其死となるの理は全く同じであります。

第十五圖　死の形（其二）　（一）の如き黑先手とすれば、圖示の如く黑一と打ち白二の時、黑三と置き、白四黑五と打て此數子の白は死となる、其形は（甲）圖の如くイは缺眼であつて、中は前圖（一）と同じとなつて居ります（二）も同じく、黑先手にて圖の如く打てば同じく白死となります。

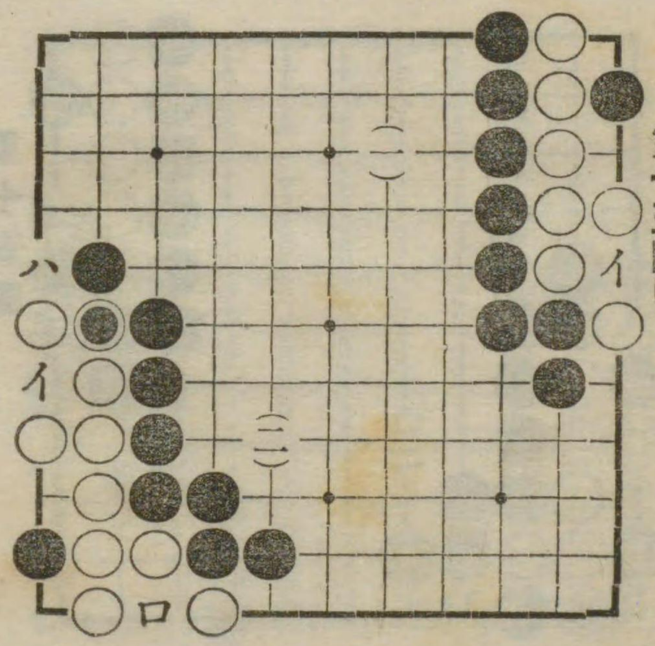
猶圖によりて缺眼、一眼の區別を詳細說明せんに



第十五圖

（甲）圖（一）のイ及び（二）のイ、ロの如き盡く缺眼として之れは活を得るの條件としては、少しも其効力無きものであります。

何故なれば今（二）圖イについて説明するに◉印の點が若し白である時、初めてイは完全なる一眼とする事が出來るが、圖の如く黑を以て塡充しある時、黑假りにハとすれば、次に白一子は當りになつてイに侵入さるゝ事となります（斯く盤の端にある時に限つて圖の如く其三方を圍めば一子を提去る事が出來ます。）

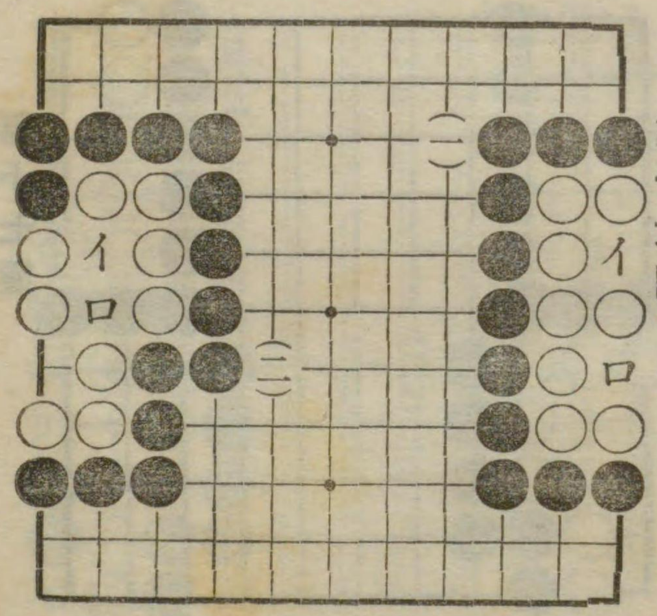


第十五圖甲

活

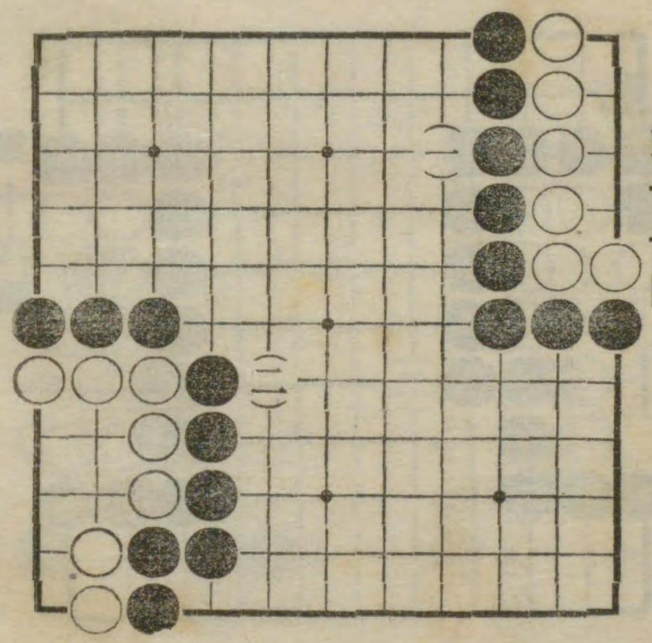
第十六圖　活とは前述の如く敵に外面を盡く包圍さるゝも、内に完全なる二眼或は夫れ以上の眼形を有する時總て之れを活と稱へる。

二眼の活　第十六圖（一）の如き、白は別々に完全なる一眼づゝを有して居る、（第十一圖參照）又（二）も同じく若し此形に於て、黑イに打つとすれば、白はロと提り、又白イと打込む手をロに打込めば、白イと提つて（一）と同じく完全なる二眼となる。



第十六圖

第十七圖 活の形(其一)　活も其形亦實に千差萬別にして限り無きものであるが今其中最も普通なるものを擧ぐれば(一)の如き、白は一見別々に二眼を有せざる如く見ゆれども、然し黑若し同圖(甲)の如く白の眼を奪らんと一に打込むとすれば、白二と應じてイと一の方面に一眼づゝを持ち、又黑一と打つ手を若し二の處に打てば、白一と打てロとイの方面に一眼づゝを持つ事が出來る、故に之等は既に十七圖(一)其儘の形に於て活となつて居るのであります。(二)も其形は少しく復雜なれども、理は一つにして卽ち黑(甲)の如く一に打込むとすれば、白二黑三に打てば白四と打てイと一の方面に一眼づゝを作り、又黑三と打つ手を四に打てば、白三と打てロとイの方面に一眼づゝを持つ事となります。



第十七圖

$y = ax - x^2$　$x^2 - ax + y = 0$

$a^2 - 4y \geqq 0$

$\frac{a^2}{4} \geqq y$

$y = x(a-x)$　$y =$

$y' = a - 2x.$

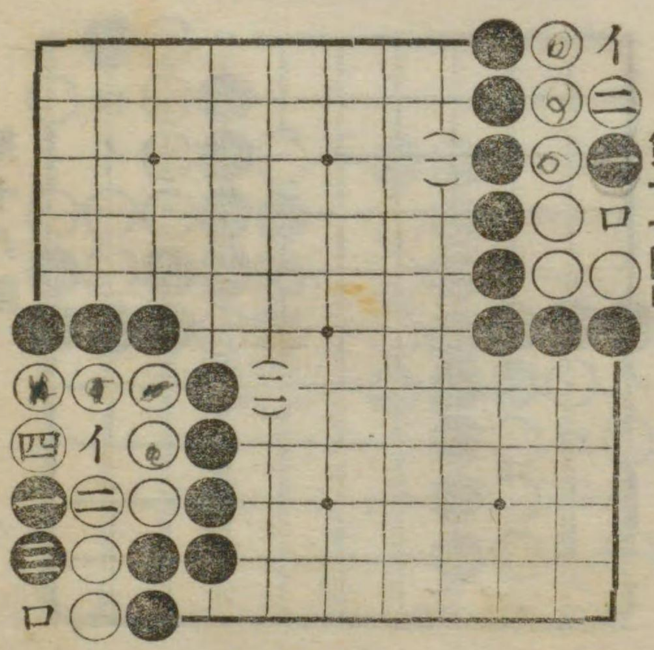
$x = \frac{a}{2} \mp \varepsilon$

$y' > 0$

$+\varepsilon.$

$y' = 0$　$x = \alpha$

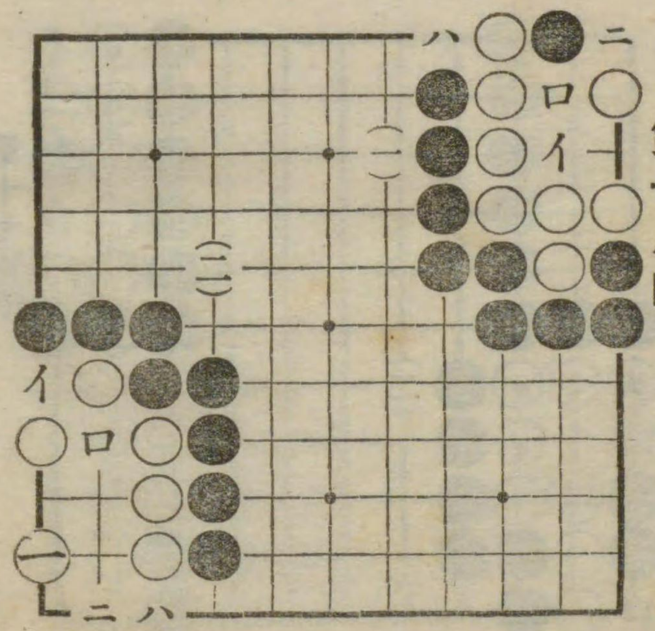
$y' < 0$



第十七圖甲

第十八圖　活の形（其二）　（一）圖、中の白は同じく活の形であります、此時黒若し白の眼を奪んとイに打つとすれば、白ロと打て別々に二眼を作り、又黒イと打つ手をロに打てば、白イ黒ハ白ニと打て同じく二眼を作る。

（二）は活に於ける稍六ケ敷形であるが、白一の手筋宜しく之れにて完全に活となつたのであります此時黒イに打てば、白ロに粘ぎ黒ハ白二と打て二眼となし、又黒ハと打つ手をニに打込めば白ハと打て、之れは（一）と同形となる。



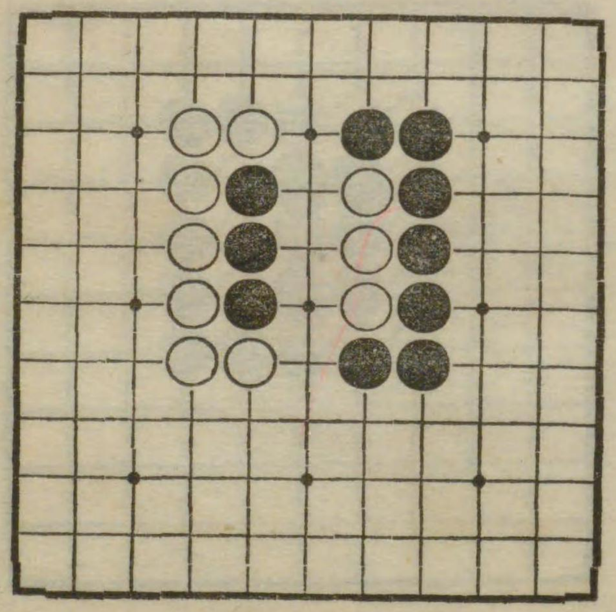
第十八圖

攻合

第十九圖　攻合とは白、黒互に接近せし時攻合とするので、敵を提るか提らるゝか、又降參するか降參させるか、二者孰れかに歸るまで、秘術を盡して戰ふを云ふのであります。

然し單に戰ふのみでは、攻合の意義をなさぬので必ず其目的物が未だ獨立して盤上に存在する資格を有せざる者の間に起る戰であらねば、攻合とは云へないのであります、猶之れを約言すれば、攻合とは彼我の接杖最も劇くして、彼幾手我幾手と、何れか將に提られんとする最も危險なる形に遭遇した時を云ふのであります。

今第十九圖の如き形に於て中の黒三目と白の三目と



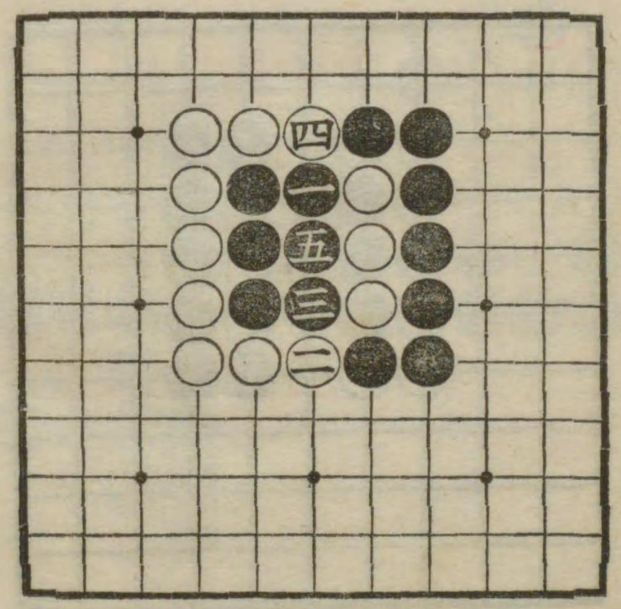
第十九圖

は互に相接して其何れか將に提られんとする危險なる形であります。

第二十圖 此際黑若し先手とすれば、第二十圖の如く黑先づ一と詰め、白二の時の時黑三と打て白の三目を切斷し、白四の時黑五と打て茲に初めて白の三子を打拔く事が出來たのであります。

而して此攻合に於て一番大切な事は、石の手數と云ふ事で、手數とは換言すれば、石の活力即ち其活力は幾つあるかを云ふのであります、若し自分の石が四の活力より無い時に、敵の活力が五つあるとすれば、敵の手數は自分より一つ多い譯であるから自分は一手後れとなりて打拔かるゝ事となります。

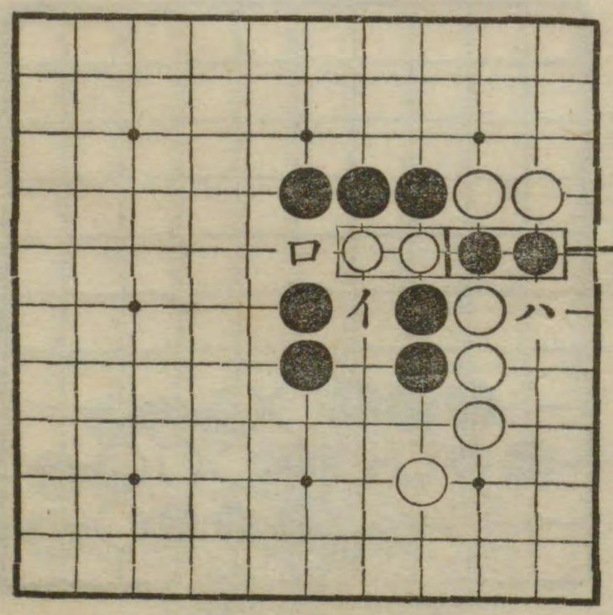
今前圖について見るに中の白と黑の三子の活力は互に三つづゝである、此際黑先手なる故に第二十圖の如く黑一と打て白を二手に縮め攻合勝としたのであります。



第二十圖

第二十一圖 攻合の形(其一) 攻合も亦死活の時と同じく其形は種々樣々あるが、今第二十一圖について見るに白二子と黑二子との攻合は、其手數は白一手(イ及びロ)黑も同じく二手(ハ及び盤面符號一ノ5の處)となつて居る、(第三頁參照)

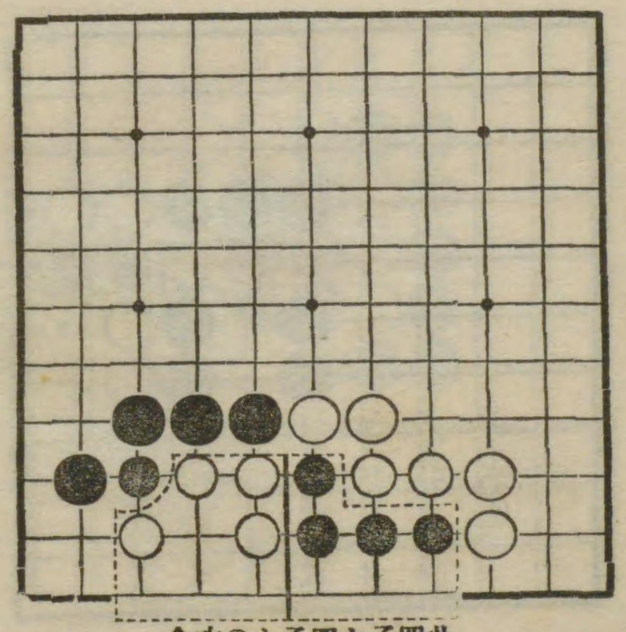
故に若し此際黑先手とすれば、イと打て無論白勝であるが、又一手段としては、黑(一ノ5)と下るも其手數は黑三手となり白二手にして黑攻合勝となります。



第二十一圖 此二子と二子との攻合

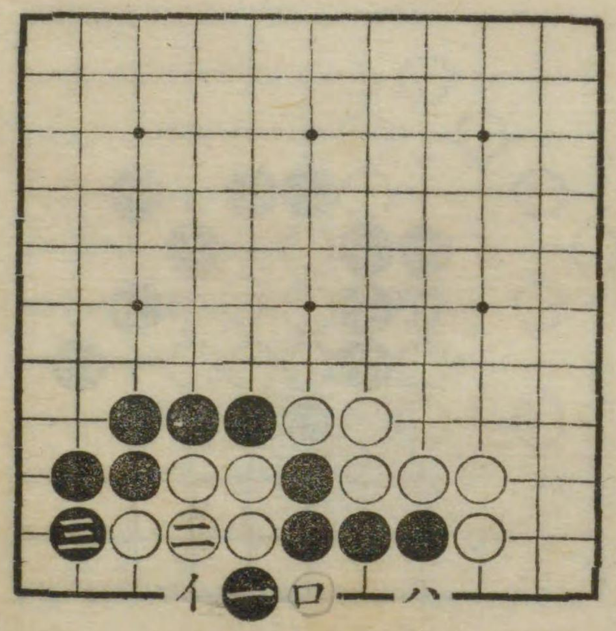
第二十二圖　攻合の形（其二）　第二十二圖黒白共に四子の攻合に於て、此際黒先手と假定するに、黒は如何に打てば、攻合勝となすを得るかと云ふと、同圖（甲）の如く一と打て白を當りとするのが一番宜い手である、此時白はイに打つも、又三に打つも黒より二の處に打たれて三子を打拔かるゝから、白は圖の如く二と打て、此三子を連續するの外は無い、然し之れも白惡しく、圖の如く黒三と約へて白を二手に縮め攻合勝となつたのである。

然るに若し黒一と攻める手を只三に約へる時は、白ロと打て反て白勝となる、其變化は此時黒一に打てば、黒イと打拔き又黒一を二に打てば、同じく白イと打拔いて黒に手段なく、又黒二をイに打つ時は、白ハと打て攻合白勝となるのであります。



第二十二圖

此四子と四子との攻合

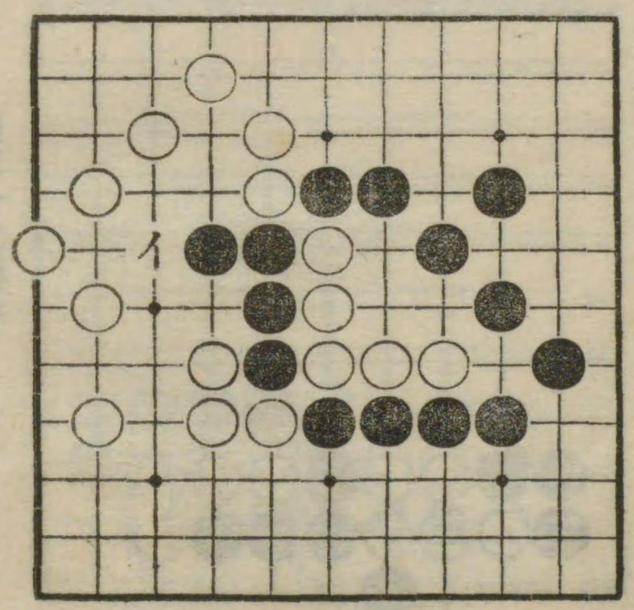


第二十二圖甲

第二十三圖 攻合の形(其三) 此形は前より稍復雜して居るが、然し變化は却て前より簡單にして分り易い攻合の形であります。

今黑先として双方の手數を計算するに、黑三手に對する白四手にして、假令此際黑先手とするも、黑敗の樣に見ゆるが、黑は或る着手によりて手數を延ばし、遂に攻合勝とする方法があります。

其手とは卽ち圖に示す黑イと打つので、斯くする時は黑は一時に二手を延ばし今度は白四手に對する黑五手となつて反對に黑一手の勝となつたのであります。

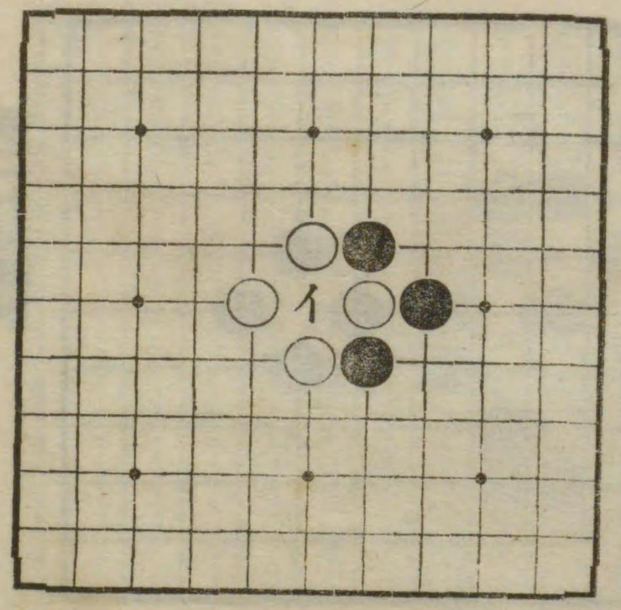


第二十三圖

第二十四圖 劫とは、假りに第二十四圖の如き形に於て、黑先手と假定するに黑は四つ目殺しの理によつて、イと白の一子を打拔く事が出來ます。

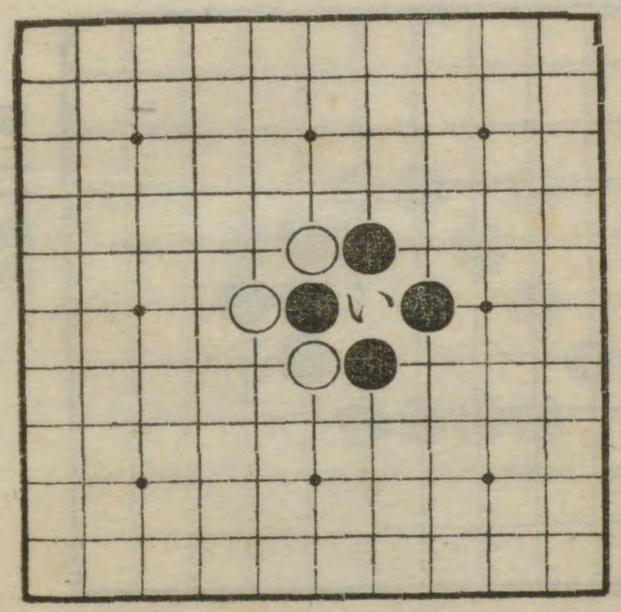
扨打拔きし跡、其形を見るに同圖(甲)の如く、次は白より黑の一目を提り得る形となつて居る、故に白は又いと打て一子を提り、次に黑の手番であるから白の一子を提り返し、白提り、黑提りと斯く双方に於て爭つて止まざる時は、到底終結す可からざるものとなるのであります。

今此狀態を指して劫と稱へ、然し此劫を爭ふに一つの法則があります夫れは劫拋と稱へて、圖中黑イと提りし時、白は他の方面に一着を下し、黑若し其方面に應ずる時、初めて劫を提るので、此劫拋は劫を行ふに必ず爲す可き一つの條件となつて居ます、(第



第二十四圖

四十六圖及び第六十四圖參照）

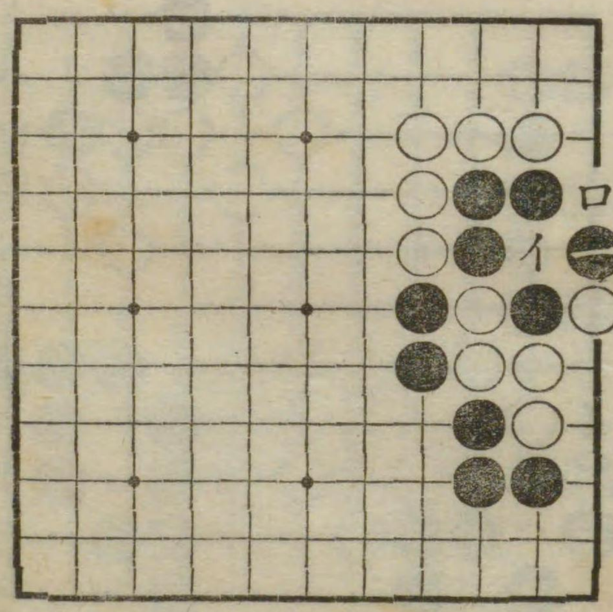


第二十四圖甲

第二十五圖　劫の形（其一）　劫の形は簡單にして必ず前圖の如く互に一子を提り合ふの外、決して劫と稱するものはありませぬ。

然し形は簡單であるが、此劫となつて現はるゝまでには、種々樣々の形を經て初めて劫となるので、時に死活に於ける劫あり、又攻合に於ける劫、或は劫として死又は活とす可く、又劫として攻合となす等一局面の中に死を活に轉じ、又負を勝に轉ずる等皆劫の活用によつて、種々なる變化を生ずるのであります。

今第二十五圖に於て、其形は攻合であるが若し普通の如く黑一の手をイと粘ぐ時は、白にロと打たれて攻合負となるから、圖の如く一と打て劫となし、白此時イと提れば前述の如く黑は他に劫拋をなして此

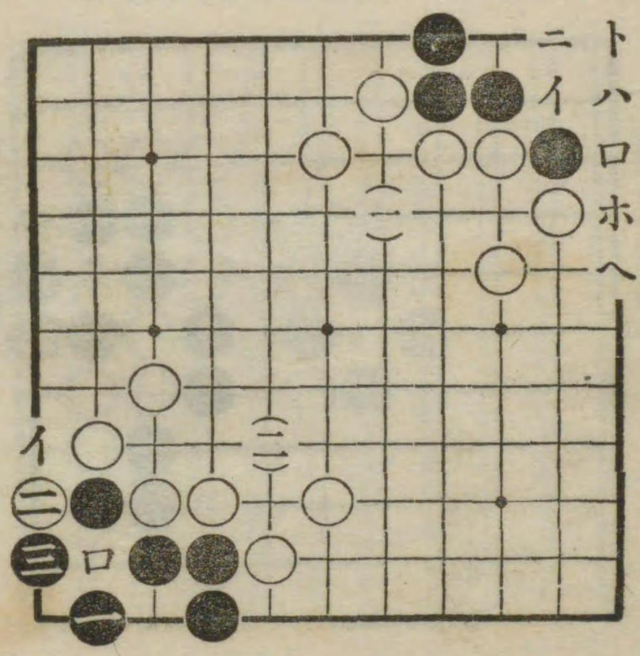


第二十五圖

れを爭ふのであります。

第二十六圖　劫の形（其二）　第二十六圖黑先手として此時黑イに粘げば白ロと打ち黑ハの時白ニ黑ホ白ヘと打て黑死の形となります、又黑イと粘ぐ手をロに下れば白ニ黑イ白トと打て之れも同じく白死となります。

故に（二）圖の如く（此（一）と（二）とは方面は異つて居るが全く其形は同一のものであります）黑一と打ち白二の時、黑三と應じて之れを劫となすのであつて、白若し劫に敗れイに粘ぐとすれば、黑ロと粘ぎ茲に黑活の形となす事が出來ます。

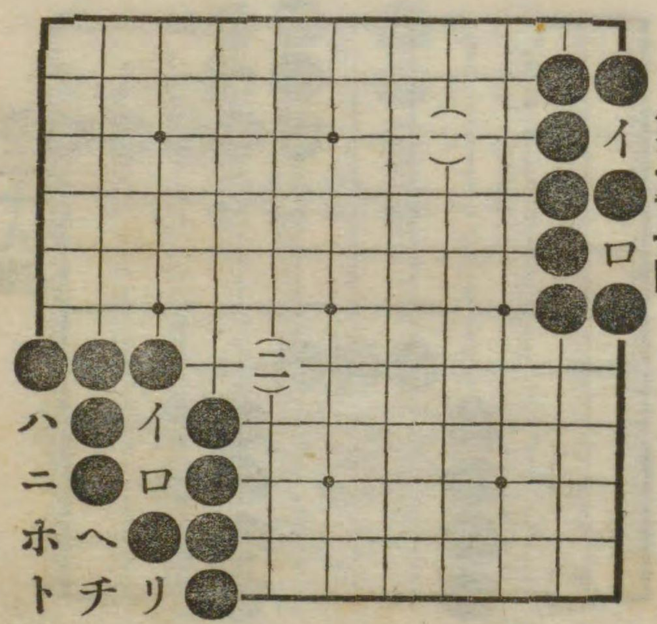


第二十六圖

地と駄目の概略

第二十七圖　石提りに於ける總ての變化は、大要以上を以て終りとなりぬ、故に次は地取りの變化に移らんとす地取りの中、地とは如何なるものを指して云ふのであるかと云ふと、之れは碁の基礎とする處であつて、其勝負は全く地の多少によつて決定する故に前述石提りに於ける總ての手段も畢竟終局に於ける地の多少を以て根本とするのであります。

然らば地の形は如何と云ふに第二十七圖（一）の黑を以て四方を圍みしイ及びロの如き點は、之れを眼と稱する事前述の如くであるが、若し（二）のイ以下リの如く多數を有する時（之れを眼と稱する事も出來るが）之等を地と稱へるのであります。

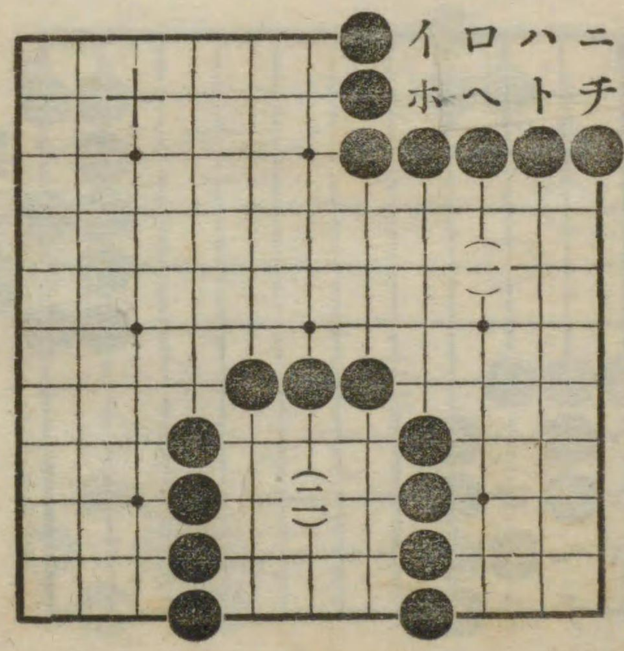


第二十七圖

故に地と眼との差別を略言すれば、死活の時之れを眼と云ひ眼の擴大されたるもの之れを地と稱す。

第二十八圖　（一）及び（二）の如き、斯く完全に圍まれたる中の空地は、前述の如く地と稱するので、此中（一）はイ、ロ、ハ、ニ、ホ、ヘ、ト、チと八目の地（二）は黑十二目の地を有して居ます、而して地は其外面を包圍する石に少しの缺點も無きを最も必要とするので、若し之れに少しでも缺點ある時は、未だ地とは稱せられぬのであつて時として敵に侵入せらるゝ恐れがあります。

丁度之れは一眼と缺眼の別ある如く、眼は其組織に缺點なきを必要とし、若し其組織に缺點あれば之れを缺眼と稱へて敵の侵入に委するの止むなきと同じ



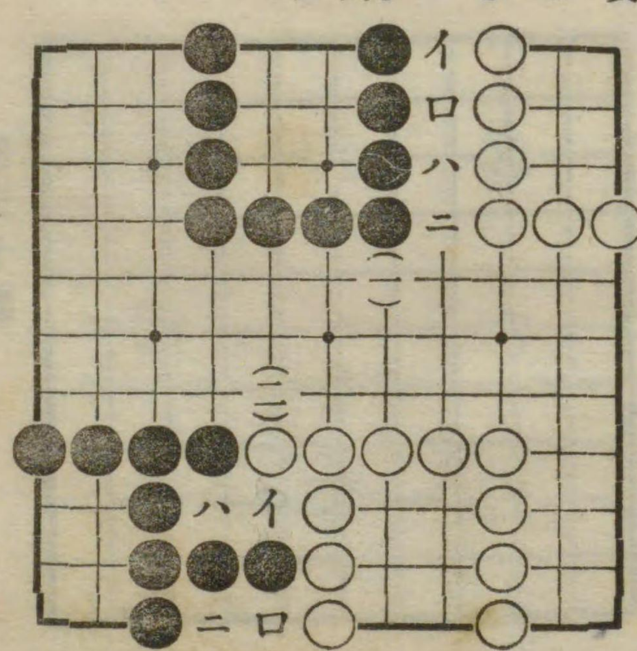
第二十八圖

理であります。

第二十九圖　駄目　前說の如く完全に四方を圍みし中の空所を地と稱へるが、然し茲に多くの着手を費すも一目の地も得られぬ地點があります、今之れを駄目と稱し駄目は其一局を打ち終るまで何等の用をも爲さぬ處を云ふのであります。

第二十九圖（一）白は中に六目の地を圍み、又黑も同じく六目の地を圍つて居る、然るに白と黑と相對峙せる中間イ、ロ、ハ、ニの如き點は何であるかと云ふと、茲は白より着手するも、又黑より打つも地取り又は石提りについては少しも其効力はありませぬ、卽ち之れを駄目と云ふのであります。

然るに（二）のイ及びロの如きは此處に黑より着手すれば、ハ及びニに一目づゝの地を得、又白より打つ



第二十九圖

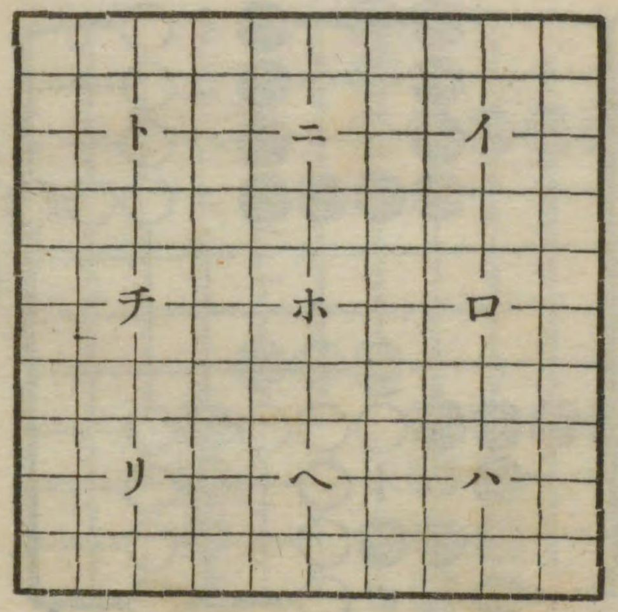
とすれば、一目の地も無くなります、故に此(二)と(一)とは同じ樣であつて其實大に異つて居る地點であります。

一局の打初めより打終りまで

石の配置

第三十圖　實際對局する場合初心者は强者に對して其力量相當に石を置き初めて對局するので、之れを名づけて手合と云ふ。

手合に井目(九目)以下八目、七目、六目、五目、四目、三目、二目、先、相先の別があります、井目とは第三十圖の如くイ、ロ、ハ、ニ、ホ、ヘ、ト、チ、リと九子を盤上に置くを云ふのであつて、八目とは井目の中よりホの一子を取り、七目はホの一子を其儘とし



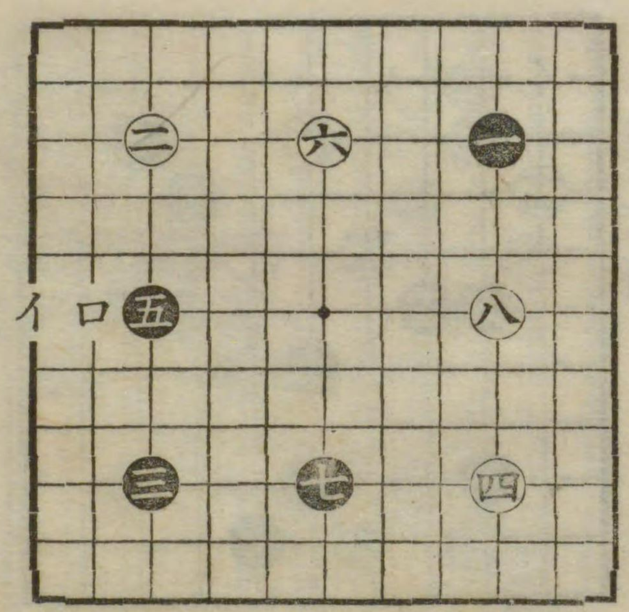
第三十圖

てニ、への二子を取り、六目はニ、ヘ、ホの三子を取り、五目はホの一子を其儘としてニ、ロ、ヘ、チの四子を取り、四目は盤上イ、ハ、ト、リと四隅に置き、三目はイ、ト、リ二目はイ、リ先は初め任意に一着を下し互先とは互に先を持ち合ふと云のであります。

第三十一圖　今一局の打初めより、終局打上げまで說明するに、茲に先の配置を引用して以て其利害得失を詳細研究せんとす。

先づ最初黑は何れの地點に據るを以て、最も策の得たるものであるかと云ふと圖の如く黑一と一隅を占領するを盤上に於ける一番好點とします、次に白も同じく二と他隅に打ち、次に黑三白四と各々四隅に割據したのであります。

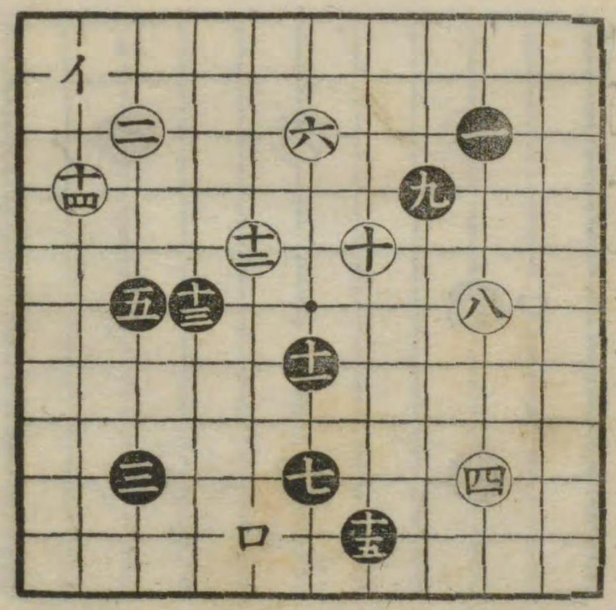
四隅の配置終りし後、次は何れの點を最善とするか



第三十一圖

と云ふと、圖の如く黑五と第三線に打ち（此三線とはイ、ロ及び五と第三の線に當る故なり）次に白同じく六と打ち黑七白八と各々三線に打つ順序となります、故に配置に際しては、最初は隅、次は邊の第三線に據るを最善の布石とするのであります。

第三十二圖　白八までは前と同一である、（以後配置を説明するに便宜上一局を（三）圖或は（四）圖に分つので今此局の如きは十數圖に分れて居ります）前圖の如く白六、八と迫りし故に黑は一の一子を守る可く、先づ九に尖み、次に白十と其出路を防ぎし時黑は一、九の二子を其儘として十一と一間に飛出し、白十二に打ちし時黑十三と守り以て三、五、七の方面の地を確守したのであります。



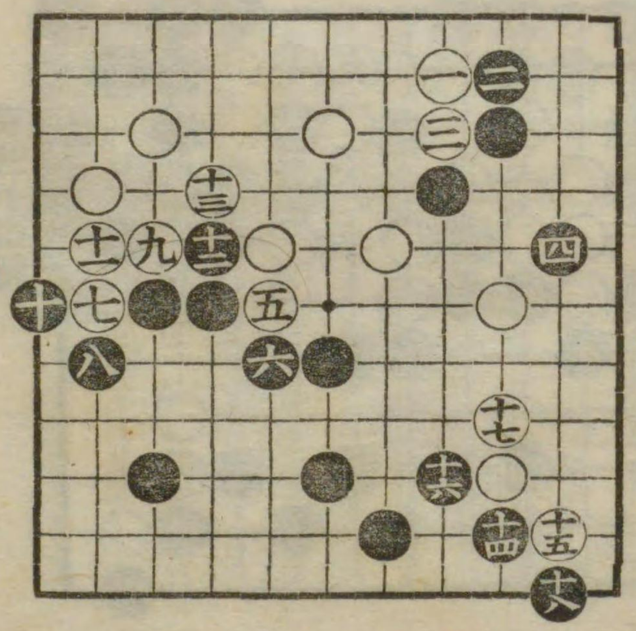
第三十二圖

白十四と打てイ方面の地を守りし時、黑も同じく十五と尖んでロの地を白に侵されざる樣準備を爲したのであります。

之に依時は配置の正當なる順序として、三線を打終りし後各其内外に向て發展するを最も宜しとする。

第三十三圖　本圖も亦前圖の續きにして、此中黑及び白の丸々は前圖十五までの配置其儘を○●として掲げたのであります。

初め白一と打て黑に迫りし時黑二と守り、白三に突當りし時、黑四と桂走して此石を活形についた、白五以下十一まで黑に密接して侵略を計つた時、黑も同じく相接して之れを防ぎ、以下白十三と打つに及んで此方面漸く一段落となりし故に、黑は轉じて十四と附け、反對に白の地に侵入したのである。



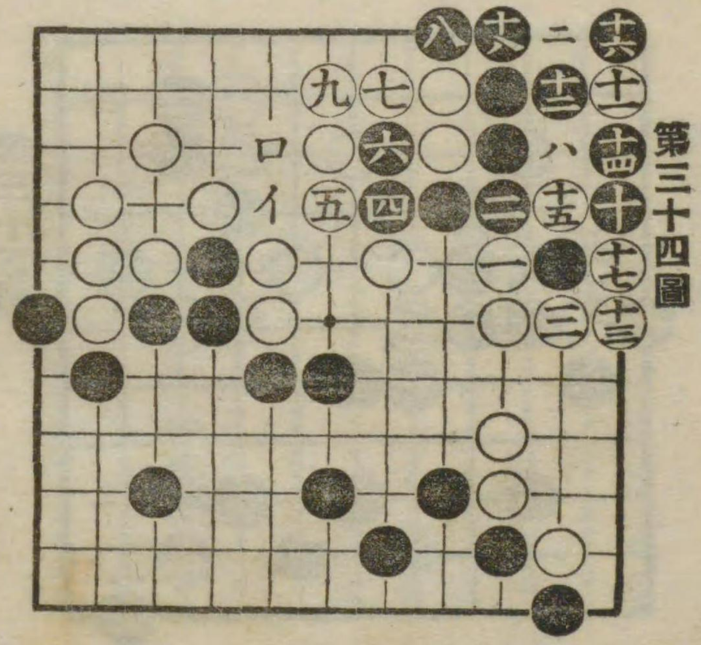
第三十三圖

白十五に約へ、黑十六に綽ね、白十七と行びし時黑十八と打て左方の地を廣くし、且大に白の地を縮少したのであります。

死活の練習

第三十四圖（前圖の續き）白一黑二白三と約へ黑四と出し時、白若し五の手にて十五に切る時は、黑五に打ち白イに粘げば、黑六に出で、白七黑九に切り、白ロ黑八と打て三子の白を提る事が出來ます。故に圖の如く白五と約へ黑六に出で、白七黑八と打ちし時に白九に粘ぐの外無く、依て黑十と打て眼の形を成したのであります。

白十一の打込は、黑を一眼死となさんとする手段であつて、之れに對して黑は十二に突當り、以下白十

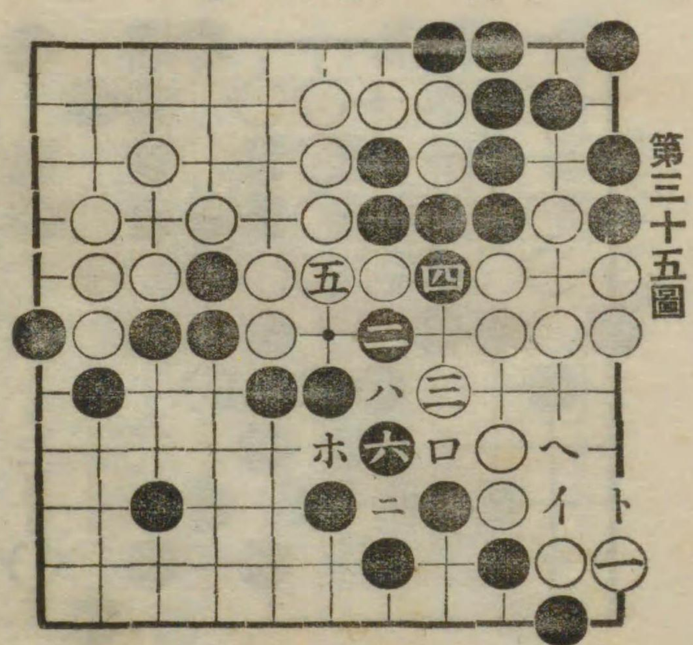


第三十四圖

五に打込みし時、黑十六の提り大に宜し、若し此手にて八と一子を提る時は、白十七に打ち黑十六白十八に打込み黑二と提るも此十五と十八は缺眼となつて居るから、黑は一眼死となるのであります。黑十八の粘までにて黑は漸く二と十一との二眼を得る事となつた。

第三十五圖（前圖の續き）白一の行は必要なる一着であります、若し手を拔き一の手にて六の邊に打つ時は、黑イと切り白ヘに打てば、黑一と打て一子を打拔く可く、又白ヘの手にて一に下れば云ふまでも無くトと打て二子を提る、之等の損得は只白一二子の死活に關するばかりで無く地の廣狹にも影響する大きい處であります。

次に黑二と尖附けし時、白三と打つ手で若し六まで



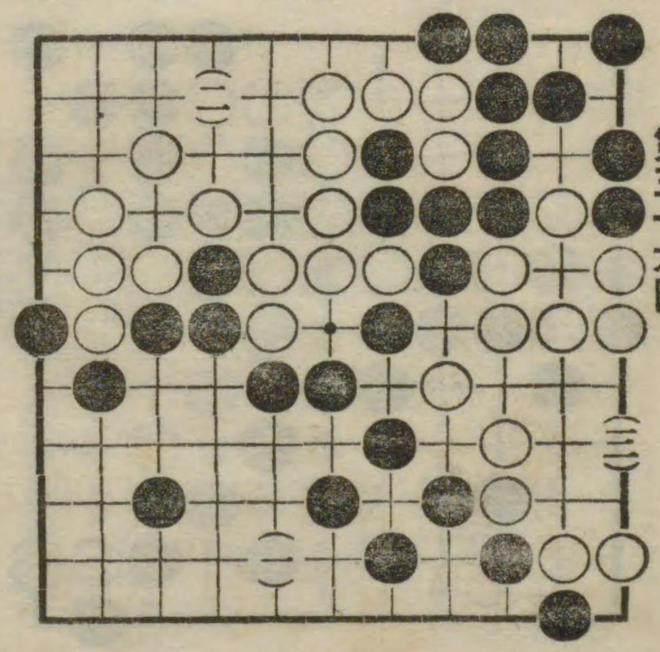
第三十五圖

突進する時は黑ロと出で、白三の時黑八と切斷して此白六の一子は孤立して如何とも打ちようが無い事となる。

故に白三と打ち黑四と當て、白五と粘ぎし時、黑六の守りとなつたのであります。

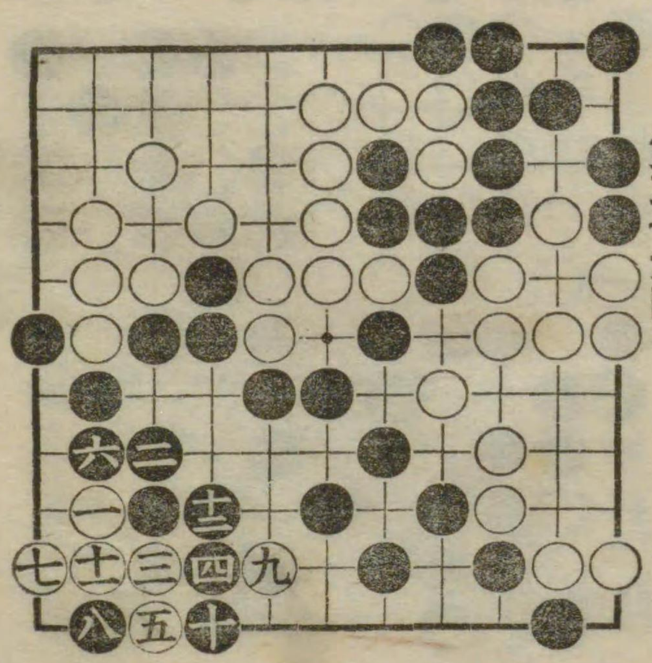
第三十六圖　今第三十六圖に於て白、黑の大勢を觀るに、黑は（一）の方面に廣大なる地を有す、而かも此地は其組織に缺點なく、又白より侵入する手段方法も無いのである、若し假りに白强いて此地に打込むとも其打込みし石は盡く黑に圍殺さるゝ結果となるのであります。

今其一例を示せば、同圖（甲）の如く白一に附けるとすれば、黑二と堅くし白三と綽ねし時、黑四に約へ白五黑六白七の時、黑八と打て白の眼を奪ひ、白九



第三十六圖

に附ければ黑十と當て、白十一黑十二と粘いで茲に全く白に手段はありませぬ、猶此他に種々白より打つ手もあるが皆黑に正當に應じらるゝ結果として一つとして白に活路は無いのであります。



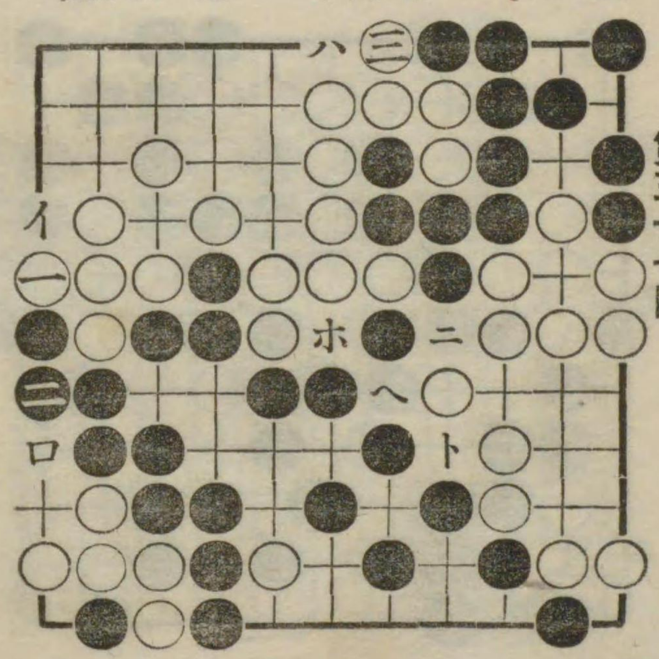
第三十六圖甲

終局打上げ後の作り方

第三十七圖　終局の爭ひ　（第三十六圖（甲）の續き）

白一の手はイに一目の地を增す着手である此時黑二の手にて、若し三に出ずれば白二と一子を打拔き、黑ロの時、白にハと約へられて黑惡し、白三は同じくハに一目を增した手であつて、此手までにて此局面全く終りとなつたのであります。

猶終局後ニ、ホ、ヘ、トの如き打着點が殘つて居る之れ卽ち前述駄目と稱せらるゝ地點であつて、此處は白又は黑何れより着手するも少しも地に影響無き處であります。

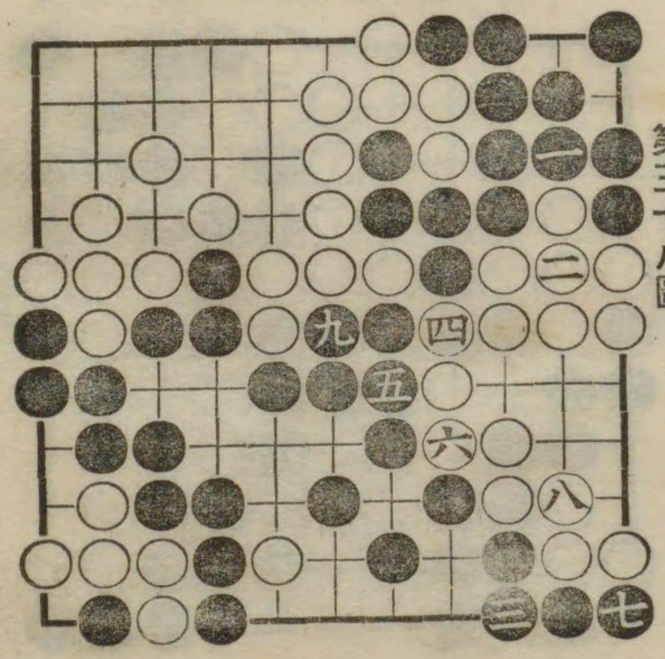


第三十七圖

第三十八圖　駄目の塡充　此際黑先手なる故に、黑一と塡め白二と粘ぐ、此黑一白二は共に駄目として は必要なる處である、然し何れにしても白、黑共に斯く交換あるの外打ち方も無い處であります。

次に黑三は後に七の點が塡充せられし時、黑は一子を打拔かるゝ形となるから、先づ此處に備へ、次に白四黑五白六と互に駄目を塡めあひ、黑七と打ちし時白八と補ひて二子の切り提られを防ぎ、黑九と塡充して全く一局は終了を告げたのであります。

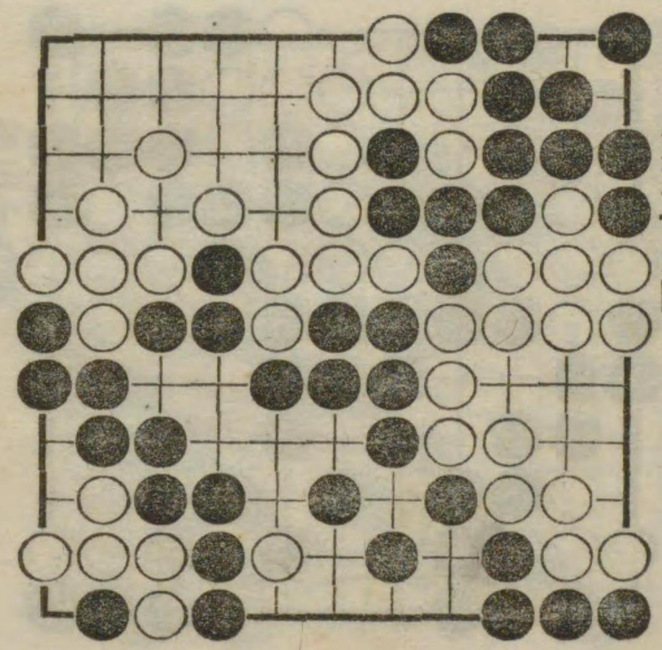
故に以後は、早打着點も無き故に、互に地の廣狹を計算して、其勝負を知る順序となつたのであります。



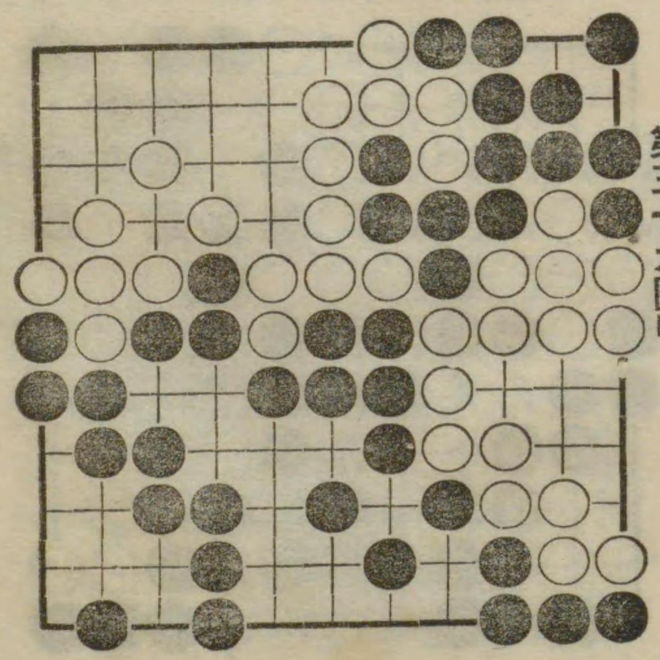
第三十八圖

第三十九圖　打上げ後の作り方　扨如何にして白及び黒の地を作つて其勝負を知るかと云ふと、初めには先づ敵の提石を勘定して敵地を塡める準備を爲すのであります。

此提石を俗にハマと稱し、ハマの多少は地の廣狹に關するのであつて、今此局面に於ては、黒は一目の白を提り、又白は黒の一目を提つて居る、（第三十四圖參照）黒は十六と打て一目の白を打拔き又白は十五と一目の黒を打拔いて居る）猶下の白六目は死となつて居るから、併せて之れをも打拔く時は、第三十九圖（甲）の如き形となつて、黒は合して七目のハマを持つて居る譯となる。



第三十九圖



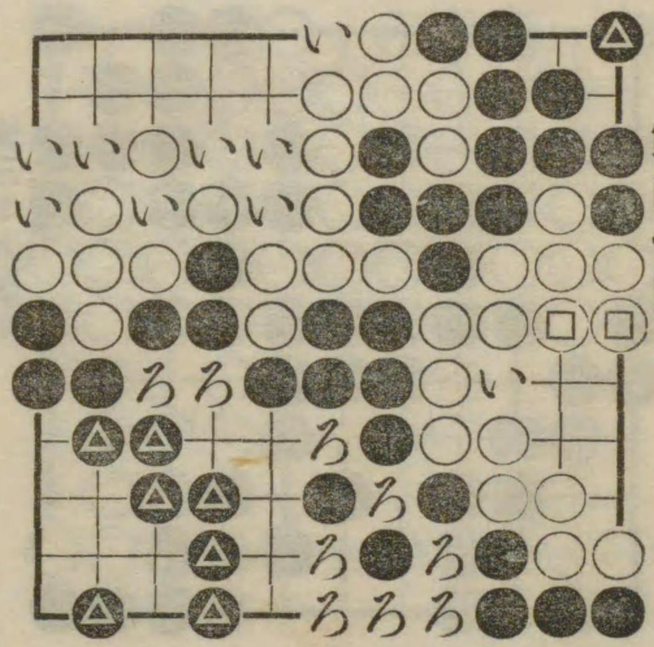
第三十九圖甲

第四十圖　盤上のハマを提り上げて後、黑は白の地を作り、又白は黑の地を作るを定法とする、其作り方は何れの方法によるも隨意であるが、只一見して敵の地が何目あるかを分りやすくするを以て第一とします。

今此局に於て、黑は白の地を分り易くする便宜上印の白を取り去り之れに七目のハマを加へて印に塡充する。

又白は△印の黑を殘らず取り去り、之れに一目のハマを加へてろ印を塡充する、斯くする時は次圖の如く其計算は一見明瞭となるのであります。

附言、ハマは斯く敵地を減ずる用をなすので、一目の提石多ければ、夫れ丈勝負に於て我に利ある事勿論であります。

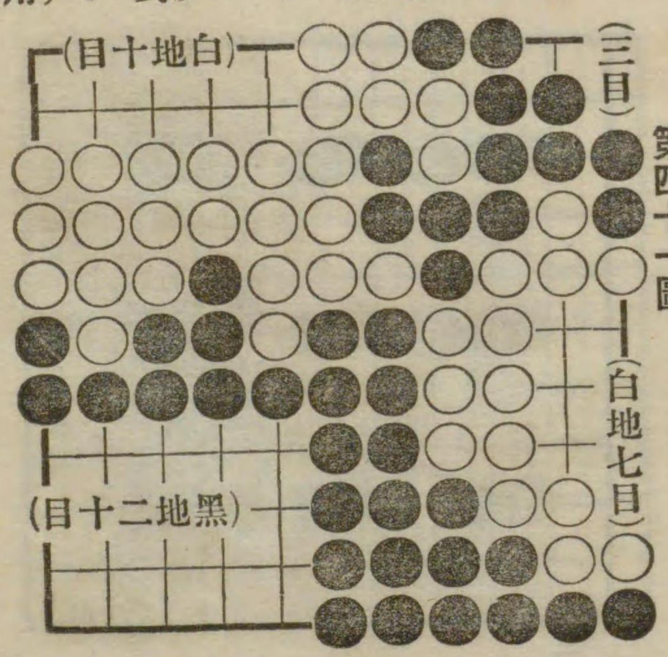


第四十圖

第四十一圖　前の如く黑は白の地を作り、又白は黑の地を作りし結果、本圖の如く黑は二十三目の地を得、又白は十七目の地を得て居る。

卽ち黑は白より六目の地を多く持つて居る譯で、之れを黑六目勝と云ふ、猶勝に何目勝と中押勝との二種類あります、此中幾目勝とは、終局作り上げて後幾目と確定せし時を云ひ、中押とは中途にて勝負分明し、爲めに終局まで打たずして中盤之れを放棄せし局面を云ふのであります。

附記、以上は一週間速進の圍碁の大綱にして、其變化は無數でありますが、要點は先づ以上を以て終りました、以後の配置必勝法は之れまでの應用によりて益々其効果著しきものであります。



第四十一圖

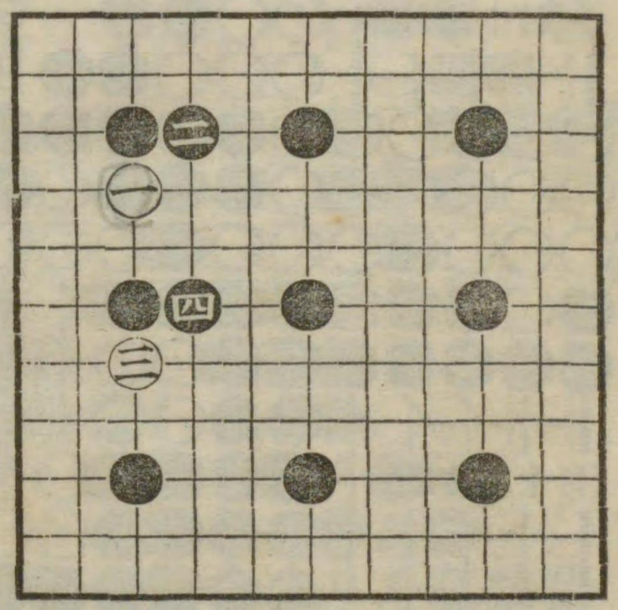
必勢の石配

井目必勝法（第一局）

第四十二圖　手合は井目より相先まである事前述の如くでありますが、此中より今井目の配置二局と、四目の配置二局、先の配置二局とを擇び其手段を詳細説明する事とする。

若し此三つの配置について其大要を了解すれば、他の八、七、六、五、三、二の布石も之れと大同小異のものであつて別に煩はしく説明を加へる程でも無い。井目置碁は、黑は盤上の要點を盡く占領して居る譯で、白は此中に打込活路を得る事至難である、故に黑の應答に誤り無れば白全滅の外は無のであります。

圖中白一と附けし時黑は如何に應ずるが一番確實で

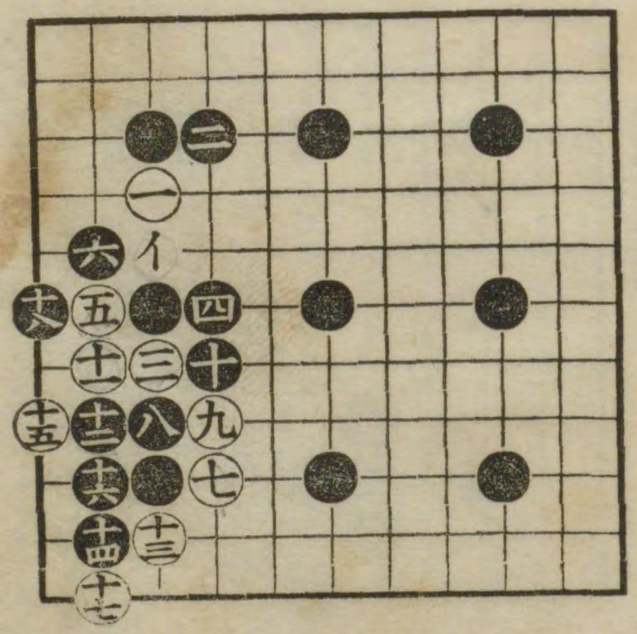


第四十二圖

あるかと云ふと圖の如く二と連續して立ち又白三と附けし時も同じく黑四と二子連續して之れに應答するを最も宜しとす、斯く打つ時は皆白一子に對する黑二子となり黑の優勢たるは云ふまでも無いのであります。

第四十三圖　（前圖の續き）　前の如く白一と附けし時は、黑二と立ち、白三と附けし時は黑四と立つを一番確實なる應手とするが、圖の如く白五と第二線に綽ねし時は、黑も六と第二線に約へて少しの危險も無い、何故なれば斯く盤の最下端に近き時は、白イと切るも、黑は十一と切て五の一子を提る可く、從つて白のイと切りし手は、無効となるからであります。

次に白七と附けし時は、黑堅く八と連立し白九の時



第四十三圖

黑十と打て、白三、五と九、七とを二つに切つたので、此十の着手の如きは最も緊要なる一着であります。

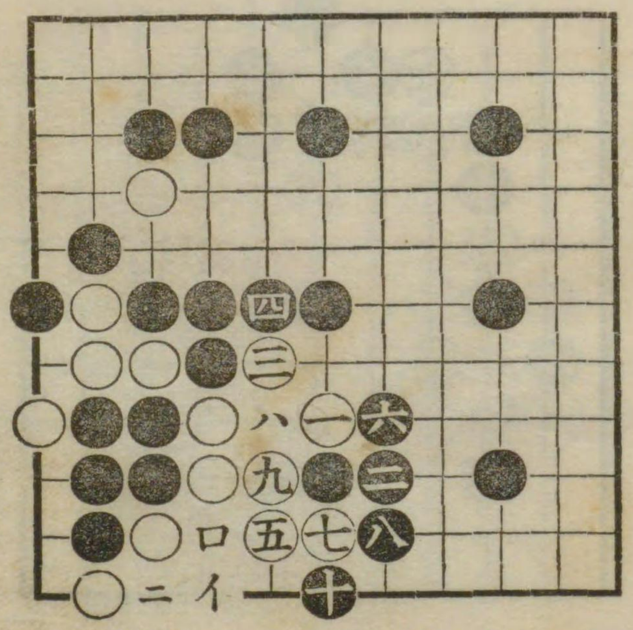
攻合の練習　此時白は三の一子當りとなり居る故に先づ十一と粘ぐ、此際白、黑の形を觀るに、白三、十一、五の三子と九、七の二子とは連絡なく甚だ危險なる石であるが、又之れと同時に黑の八及び隅の置石二子も危險なる形である、卽ち此接狀を指して攻合と稱するので、其手數は白三手、黑同じく三手となつて居るから、圖の如く黑十二と打て白を二手に縮め此攻合勝としたのである、白十三と綽ねし時は黑十八の處に打てば三子の白は直ぐ當りとなるも、又圖の如く十四に約へ白十五黑十六と打つも同じく攻合勝となるのであります。

第四十四圖（前圖の續き）　白一と打ちし時黑は例によつて堅く二と引き白三黑四と同じく連續した就中四の一着は大切なる處にして、若しも白より此點に打たるゝ時は、黑は中央の一子と左邊の石との連絡を絶たれるので其結果は別として斯の如き形となる事は常に黑の避く可き處であります。

死活の練習　白五と打ちし時其形を見るに下邊に今一着白は費すも到底活を得るの餘地無き故に黑は圖の如く六と約へて上を堅くなしたのである。

次に白七に出で黑八と約へ白九と打ちし時、黑十と打て下に白は一眼より無い、此際假りに白イに打つとするも八及びニの點は缺眼にして只ロの一點丈一眼となつて居るばかりであります。

故に黑十までの結果白全滅の姿にして斯く黑は盡く

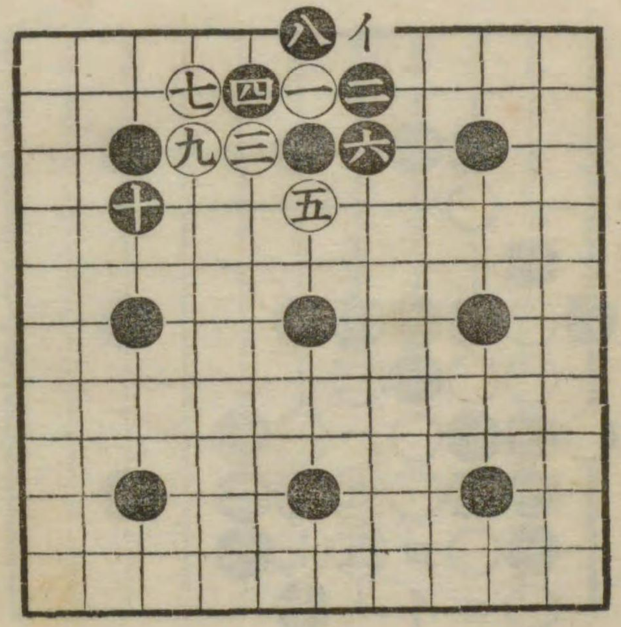


第四十四圖

連續し鐵壁の如くなりては白に手段の施す餘地なく斯くなりては黒必勝の勢ひであります。

井目必勝法（第二局）

第四十五圖　白一の如く第二線に附けし時は、黒は六或は三と堅く打つの要なく、圖の如く直に二と約へて少しの危險もない、何故なれば第四十三圖に於て說明せしと同じく、斯く一の如く盤の端に近き時黒より圖の如く置石と二の手との二着によりて壓へつける時は白は其發展す可き方面を制限せられ、此石を逃出すのに甚だ六ヶ敷石となるのであります。卽ち白三と打ちし時、黒四と切つて此石を當りとなし、白は此時一の石を逃出す手無き故に先づ五と上より當て、黒六に粘ぎし時、白七と打て一の一子を

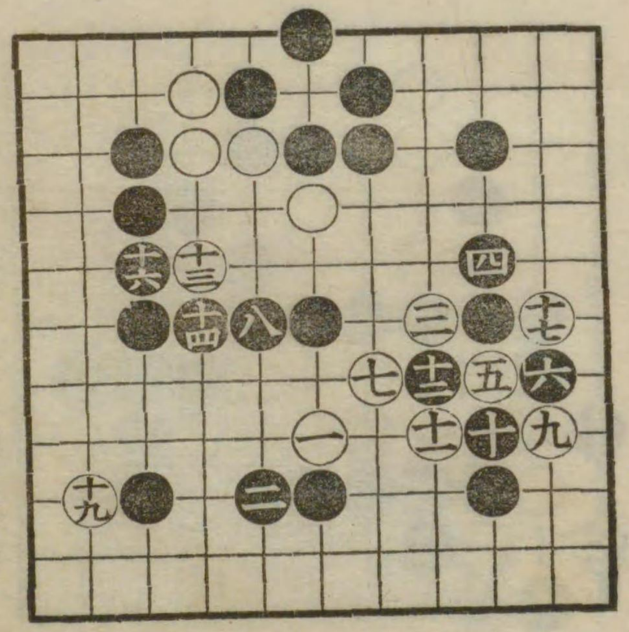


第四十五圖

捨つるの外は無い、依て黒八と一子を打拔き、白九と連續せし時、黒十と打て隅の一子を逃出した、而して此十の一着は、只隅の石を逃出すと云ふ許りで無く、四方の黒の置石と相應じて白三、五、七、九の四子を攻めて居るので此白四子は又二眼を得る餘地なく上に發展する處も無いのであります。

第四十六圖（前圖の續き）　白一黒二白三黒四と應じ、次に白五と綽ねし時黒は十二の處に切る手もあるが又は圖の如く六と應ずるも決して惡しくない。白七と打ちし時、黒八と天元（斯く盤の中央にある石を天元の石と云ふ）の一子を左邊に逃げ白九と綽ねし時、黒十と切て五の一子を當りとした。

劫の練習　白十一と打て劫の形とせし時黒先づ十二に切り、白轉じて十三と劫拋をなせし時、黒十四と



第四十六圖

(五)劫トル、(六)劫トル、(二十)劫勝粘

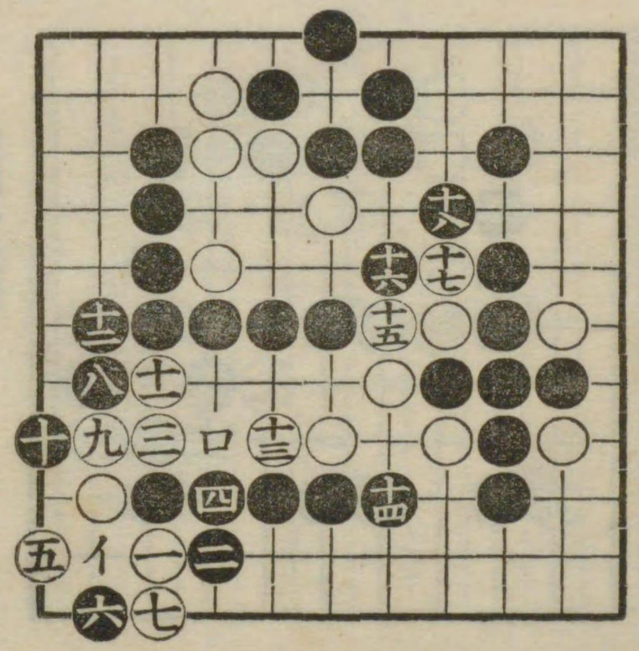
應じ、白十五の劫提りとなつたのであります。

黑十六は次に白より此點に出でゝ劫拋となすを豫防せし手であつて、右邊の劫は未だ急劇ならざる故に斯く堅守したのであります、白十七と切つて初めて大劫となり、黑十八に劫を提りし時、既に十六の方面は黑に防備せられて劫拋をなす餘地なき故に止むを得ず十九と劫拋を爲し黑直に二十と劫を粘ぎ此一戰は黑の勝となつたのであります。

第四十七圖（前圖の續き）　白一に打ち、黑二に約へ、白三と當りとなせし時黑四に粘いで此隅の白三子も同じく眼無しであります。

白五の手で若し八に打ちし時は、黑イと切り白五黑七に打拔き、白ロ黑十三と打て同じく白に手段はない。

第四十七圖



黑六と打て此處を一眼となし、次に八、十と打て眼を取りし手順大によし、黑十二は是非共斯く接續し置く處なり、若し反對に白より十二と切らるゝ時は黑の八及び十の二子は死となり、從つて白大石は活返る事となります。

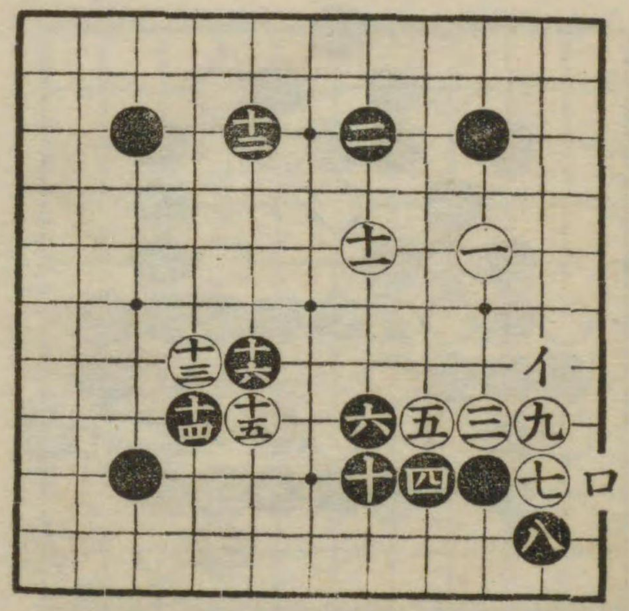
黑十八までの結果白の石全部死となつたのであります、今此形に於て白は假令ロと接續するとも、此接續せし全部の石に活なく茲に至つては早如何とも手段は無いのであります。

四目必勝法（第一局）

第四十八圖　井目置碁は前述の如く其置石多き故に此石の効力によりて劇しく白を攻擊し、石を全滅せしむる事も出來るが、四目の時は之れと異りて、置

石少き故に先づ地を占め、徐々と配置をなし無事勝局となすを專一とす可きであります。

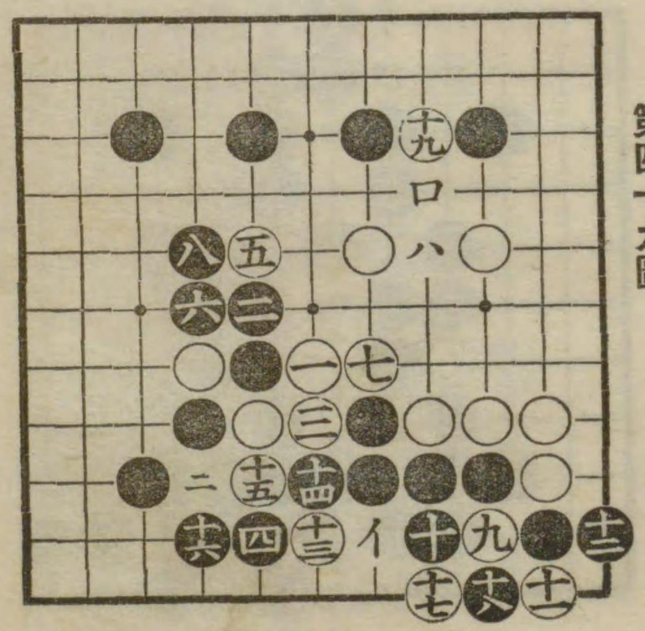
然し其間若し白に無理手段ある時は直に黑は劇しく戰となす可く、斯の如き戰は白既に其成立に無理あると、又黑は置石の効力とによりて、白を擊破する事容易であります、初め白一と一間に隔てゝ打ちし時、黑同じく二と一間に應じ、又白三と黑の石に密接せし時、黑も同じく四と連續しながら此石を堅くしたのであります。白九と粘ぎし時は、黑も同じく十と粘ぐ可く、若し又白九と粘ぐ手を十に切れば黑も九と切り白イ黑ロと一子を打拔く可く、此形は白無理にして其結果亦必ず白惡い、白十五惡し、故に黑は十六と切斷したので、斯く敵を兩斷する手は常に大に宜いものであります。



第四十八圖

第四十九圖（前圖の續き）　黑四と斜走せし手筋大に宜し、若し此手を十五に打つ時は、白に十四と出られ黑十三に打つ時は、白四に切り黑二白イとなつて黑大に惡い、之れは能く注意す可き形であります。白九及び十一の手筋妙なり、若し黑十二と打つ手にて十八と提る時は、白は十一と打て劫とす可く、黑此時劫を避けて九に粘ぐ時は、白十三黑十四白十五黑十六までの手順を經て後白にイと打たれて同じく大劫となる。

黑十八に劫を提りし時、白十九の劫拋大に宜し、若し此時黑ロと應ずる時は、白に九と劫を提られ黑ハの邊に劫拋なす時白にイと打拔かれて此一隅は黑大敗の形となります。



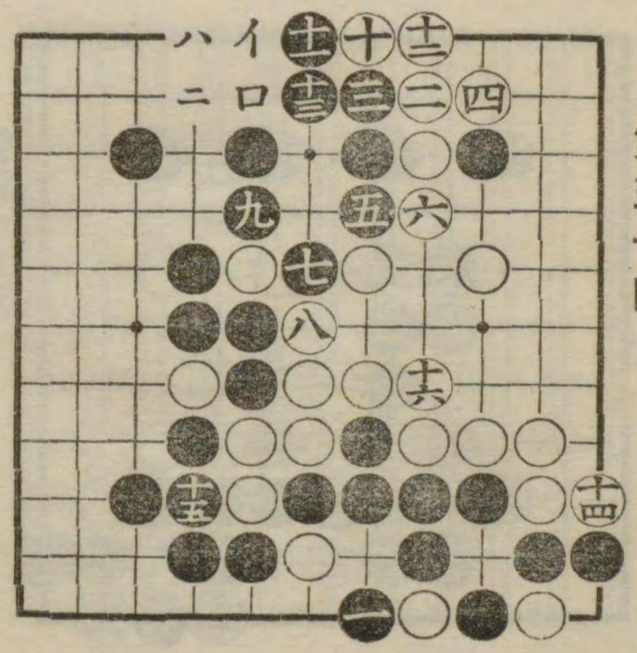
第四十九圖

第五十圖（前圖の續き）　故に黒は止むを得ず、一と打拔いて劫に勝ち、次に白は二と突拔いて黒を兩斷した、此劫替りは少しく白優勢であるが、然し大體に於て黒の形勢は非常に優つて居ります。

白二と突拔きし時黒は此隅の一子を活とする手段も無く、圖の如く三と約へ白四と隅の一子を提りし時黒五に突當り、白六黒七と打て左の地を廣くしたのである。

白十、十二を普通先手二目の綽粘と稱へる、若し黒十三を應ぜずして他に打つ時は、白より十三と切る可く斯くなる時は黒十一の一子はイと逃ぐるも白ロと追ひ黒ハに逃ぐれば白二と追ふ可く到底此石に活路なき故に初めに黒は十三の處に守るの外は無い。

白十六の粘までにて一局全く終りとなつた、此形



第五十圖

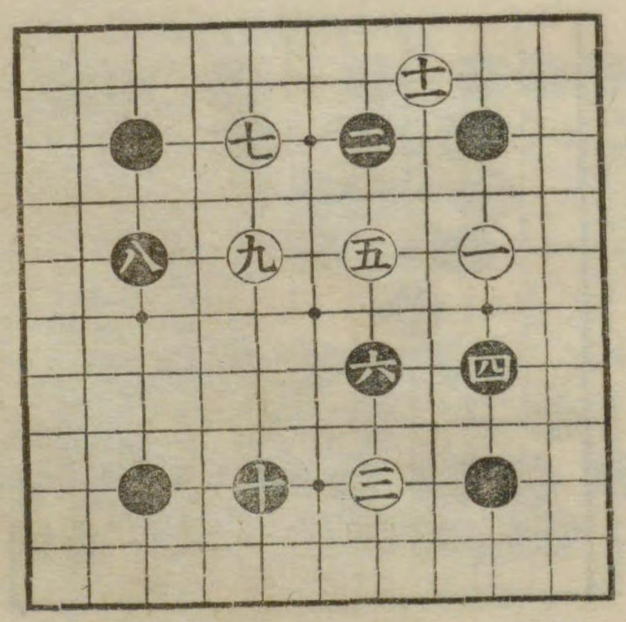
は云ふまでも無く黒全勝の勢ひにして若し此際双方作り上げるとすれば、黒三十二目の勝は確實であります。

四目必勝法（第二局）

第五十一圖　白一に對して黒二と應じ、白三に對して黒四と應じ、以下白七に對し黒八と應ずる等之等は皆初めの配置に於ける定形であります。

白九と打ちし時、黒は此處に應ずるの必要なき故に圖の如く十と打て三の一子を攻擊し併して左隅の黒を堅くしたのである。

白十一に至りては既に此時外面の一、五、九、七等白の數子を以て、黒二子を包圍しある故に斯く打て黒を攻擊したのであつて、若し此時黒は其應答を誤る

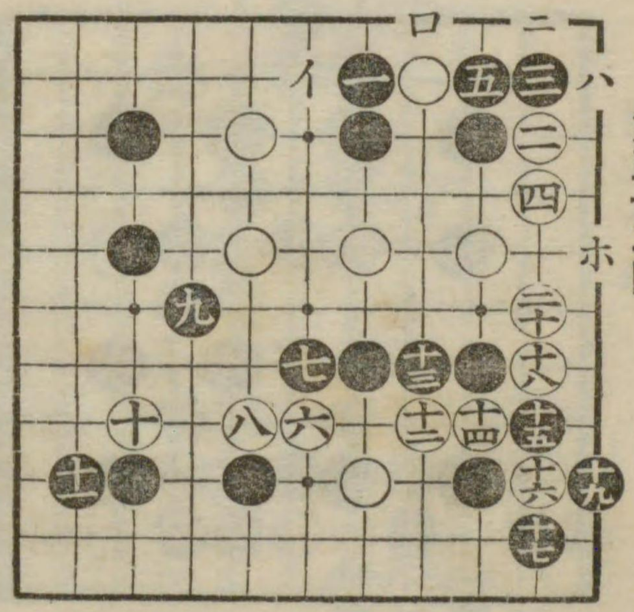


第五十一圖

時は遂には此一隅を圍殺さるゝ結果となるのであります。

第五十二圖（前圖の續き）　黒一と約へ、白二の時黒三と約へ、白四黒五まで黒の應手大に宜し、斯くなりては最早如何に白より趣向をするも黒の眼を奪ふ手は無い、今其一手段として白イに打つとすれば黒ロ白ハの時黒ニと打つ可く、又白イの手をロに下れば黒ハと打て同じく二眼を持つ事が出來ます。白六及び八は稍打過であるが、然し反對に黒より六と打たるゝ時は下の白一子は包圍せられ又活とする手段も無き故に止むを得ず白は斯く打て此石を逃出したのである。

黒九の手筋大に宜し、次に白十と附けし時黒十一と下り、白十二に覗きし時、黒十三の粘は最も緊要の



第五十二圖

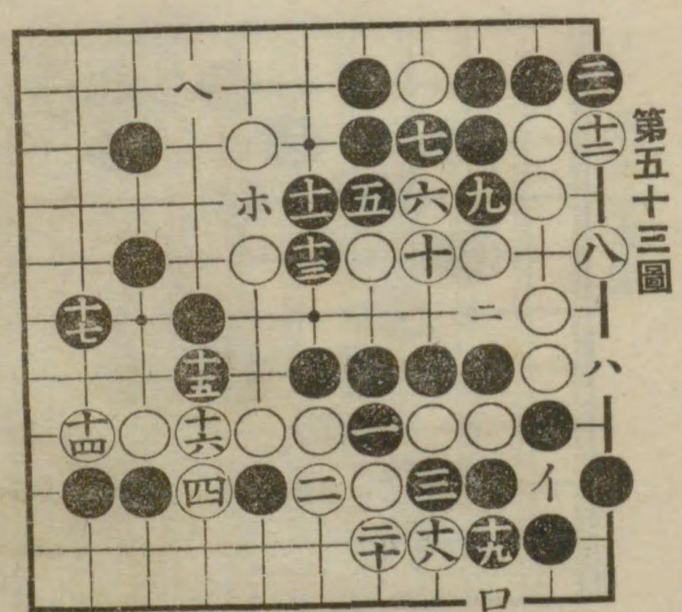
處なり。

白十六と切て一子を捨て、次に十八、二十と打ちし意味は黒を兩分し且ホの方面に眼形を得る手なり。

第五十三圖（前圖の續き）　黒一と打ちし時白二の手を若し三に粘ぐとすれば、黒二と切り、白十八黒イ白十七黒ロと打て白敗となる、故に白は止むを得ず二と粘ぎ、黒三と二子を打拔く事となつた。

黒五と打て白の眼形を奪ひ、白六黒七白八と眼を作りし時、黒九に當て白十に粘ぎ、黒十一と曲りし時白十二と打て完全に活とした、然るに此十二の手で若し十三に連續すれば、其時は黒十二と打て眼を取り、白ハ黒ニ白ホ黒ヘと打て白の大石は死となるのであります。

白十四と打て黒の二子を圍みし時、黒十五及び十七



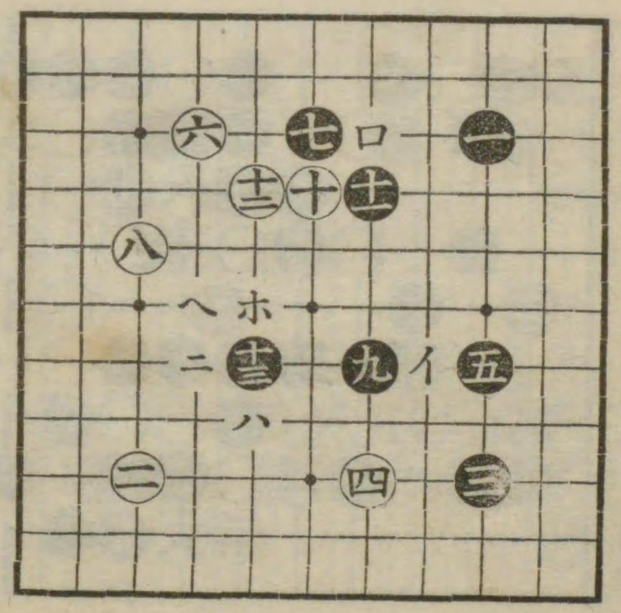
第五十三圖

と地を堅め白十八及び二十に綽粘を爲し時黑二一の約へとなり之れまでにて、一局殆んど終りとなつた、結果如何と云ふと黑は以後終局の打方に多少の失策があるとも二十目の勝は確實であります。

先手必勝法（第一局）

第五十四圖　先の局面は四目以上の置碁と異り、勝負は實に機微の間に決するものでありますから、若し少しでも失着ある時は直に勝負にかゝはり、又救ふ可からざる局勢となるのであります。

圖中黑一白二黑三までは普通着手として可もなく不可もなく、次に白四と打ちし時黑はイと應ずる手もある、此五とイとの得失は互に一利一害あれども、白を持ちし際は圖の如く五と堅く打つよりはイと高



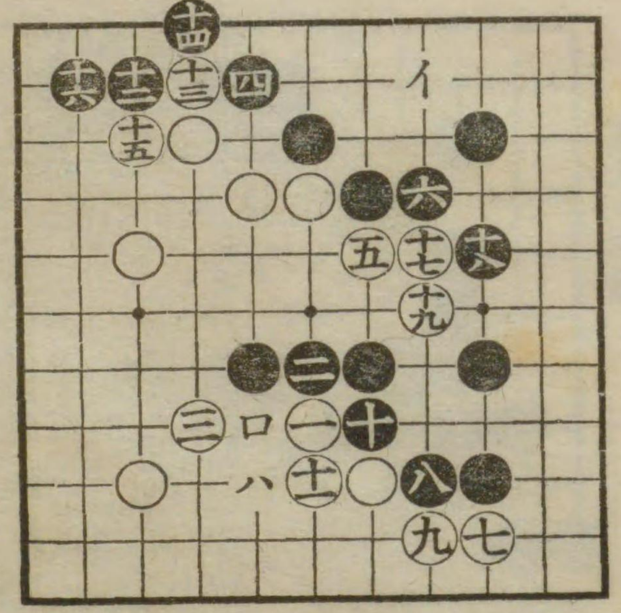
第五十四圖

く打て形勢を張るを優れりとす。

白六及び八と廣く隅を取り、黑九に飛びし時白十の附大に宜し此間實に勝負を決す可き大切の處にして若し黑十一の手にてロに引く時、白ハに打ち黑十三白ニ黑ホ白ヘとなりて其地境の比較は、却て白の優れる局面となる。

故に黑は圖の如く十一に綽ね、白十二に引きし時、先手を取つて十三と單關して白の地に侵入する方略を立てたのであります。

第五十五圖　（前圖の續き）　白一と覗き、黑二に粘ぎし時、白三と打て堅く守り、次に黑四と打ち、白五の時黑六と打て、黑も同じくイの方面を守り互角の形勢をなしたが、然し黑は猶先着の効力確かにして幾分の勝ある事明かである。



第五十五圖

次に白七の手で、若し十三に約へれば、黒ロに出で白八の時黒八と守る可く、又圖の如く白七と打ちし時は、黒八に突當り、白九に引き、黒十に當込み白十一の粘となりし時先手と取つて十二と飛出す可く此上下の二點は共に必爭の要點であります。

白十三と出でし時、黒十四と打つ手之れを盤。（ワタリ）と稱し斯く盤の最極端に於て圖の如く十四と打つ如き黒は此一着にて四と十二との連絡を取る事が出來ます。

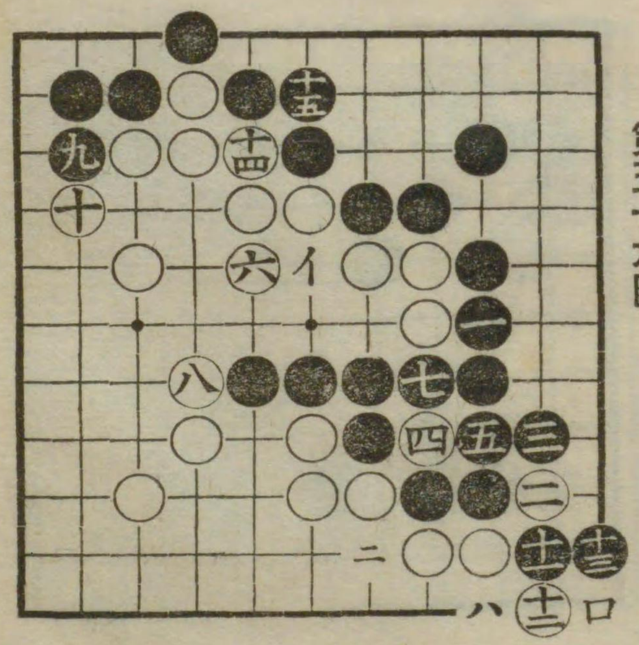
白十七及び十九は斯打て黒地を侵削するの外に手段なく黒も亦十八と打て右邊を守るの外に手は無い。

第五十六圖（前圖の續き）　黒一と防ぎ、白二に綽ねし時黒三と約へ、白四に切り黒五に粘ぎ、白六と打ちし時黒七と一目を打拔いて連絡したのである、

又若し白六の手で七に粘ぐ時は云ふまでも無く、黒にイと切る手がある、故に白は先づ六と粘ぎ黒七に一子を提りし時、白八と打て左邊の地を固定したのであります。

黒九と出で、白十に約へ、次に黒十一と切りし手は甚だ大きい處である、此處は只白二の一子の死活に關するばかりでなく、若し白より反對に此點に十一と接續さるゝ時は、十三、ロ、十二の點は盡く白の地となるに反して、圖の如く黒より一子を切提らるゝ時は八及び二の點まで白は地を減ぜらるゝ事となります。

黒十五の粘までにて略終局となり、最早打着の點も少なくなりました、此結果勝負は甚だ細かい碁ですが然し細かいながらも黒の勝は確かであります。



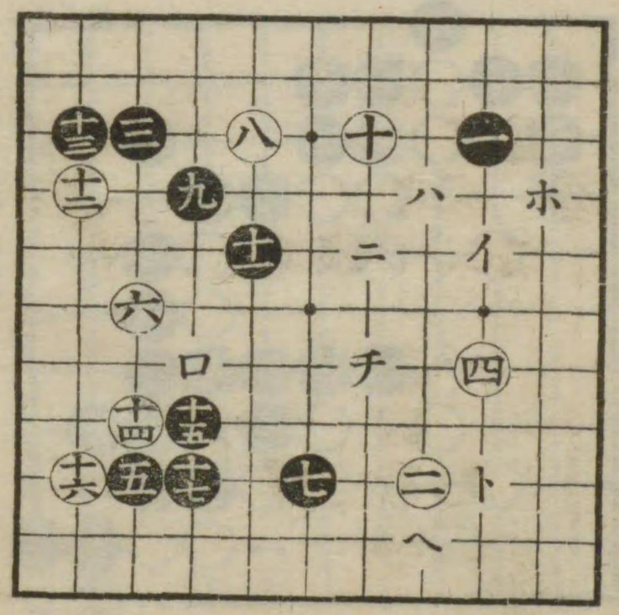
第五十六圖

先手必勝法（第二局）

第五十七圖　黒五の手まで白、黒共に普通の配置を終り、次に白六の打込に對して、黒七と二間に應じ白八と攻めし時、黒は九と尖んで六と八の白を隔て攻勢を取つたのであります。

白十の一間飛に對して、黒十一の尖み此場合大に宜し、若し此十一の手をイと一間に飛ぶ時は、白より十一と掛られ却て三、九の二子を攻めらるゝ事となります。

白十二及び十四に至りては、此際六の一子薄弱なる故に、斯く打て此方面に活を計つたのであつて、若し白十二の手でイに打つ時は、黒ロに掛け、白ハ黒ニ白ホ黒ヘ白ト黒チと打つ可く斯くなりては大に黒



第五十七圖

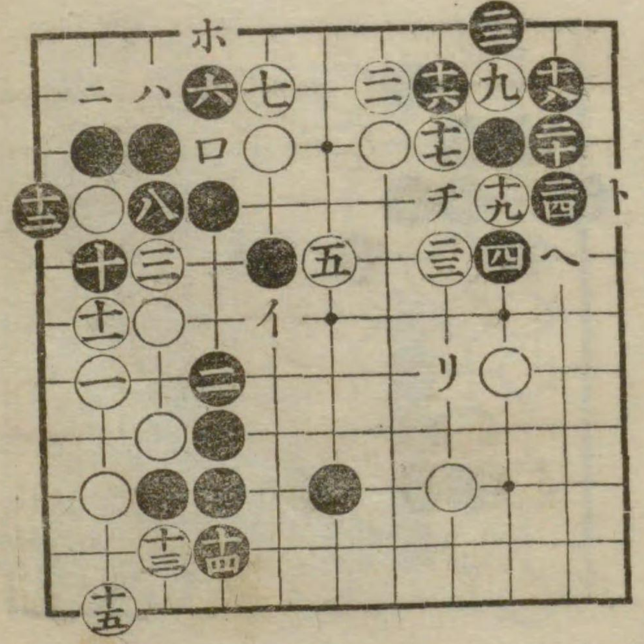
優勢なる局面となります。

白十六と二段に綽ねし時、黒十七の粘ぎ堅くして大に宜し、斯く打たるゝ時は左邊の白數子は依然として薄弱であります。

第五十八圖（前圖の續き）　白一は眼形を得るに最も便宜多き着手であります、黒二に行び、白三と活きし時、初めて黒四と應じて隅を堅め、且上邊の白二子を攻撃した。

黒八の手にて若しイに打つ時は白ロに打ち、黒若しハに粘ぐ時は、白八と切る可く、又黒ハと粘ぐ手で八に粘ぐ時は白ハに切り、黒ニ白ホとなつて之れも黒面白くない。

白十三及び十五と打て活となし、黒十六の時白十七に切て九の一子を捨て、以下二三まで外面に延びし

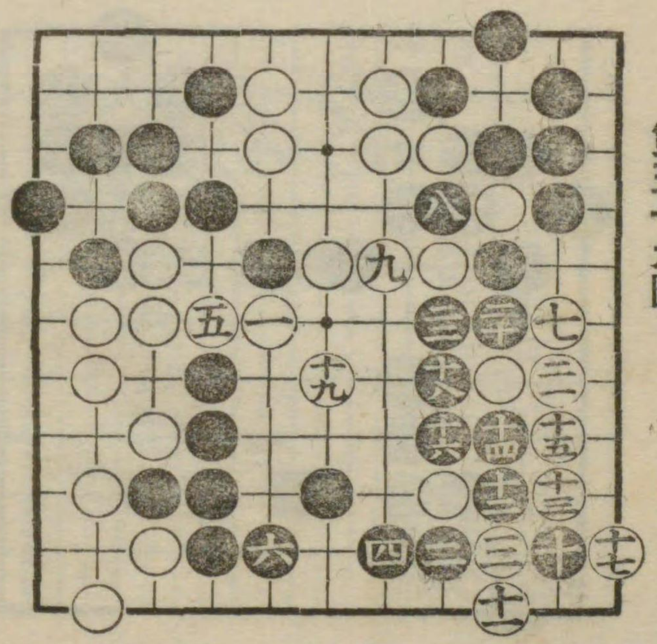


第五十八圖

手筋面白く斯くなつては此方面の白の形勢稍優つて居る、若し此着手の中白二三にて二四に打てば黑へと打ち、白トと盤りを防ぎし時、黑二三白チ黑リと打て之れ亦黑大に宜し。

第五十九圖（前圖の續き）　白一は下邊黑六目の連絡を絶つて、之れを圍殺せんとする手段であつて、黑は之に對して若し輕卒に着手する時は、遂に白より眼を奪はれて大敗を招く事となるのであります。黑二、四の附引き大に宜しく、此二着によりて黑は殆んど眼形を做したるに近し、次に白五の時黑六と守り、白七黑八と一子を打拔き、白九の時黑十と附けし手筋大に宜し。

此十と附けし手の意味は、此際白の應答如何により て、此一子を捨てゝ却て白の地を侵削せんとするに



第五十九圖

あるので、若し白圖の如く十一に下りし時は、黑十二と切り、白十三黑十四以下黑十八までの結果此十の一子を捨てゝ上の白一子を提り且つ大に白の地を薄くなしたのであります。

又前述變化の內初め白十一の手にて十二の處に粘ぐ時は黑十一に盤り、白十三黑十九となる可く之れ亦黑大に宜し。

以下黑二二の粘までにて殆んど終局となつた、以下些少侵分の手段あれども勝負に影響なく之れまでの形勢黑必勝の勢であります。

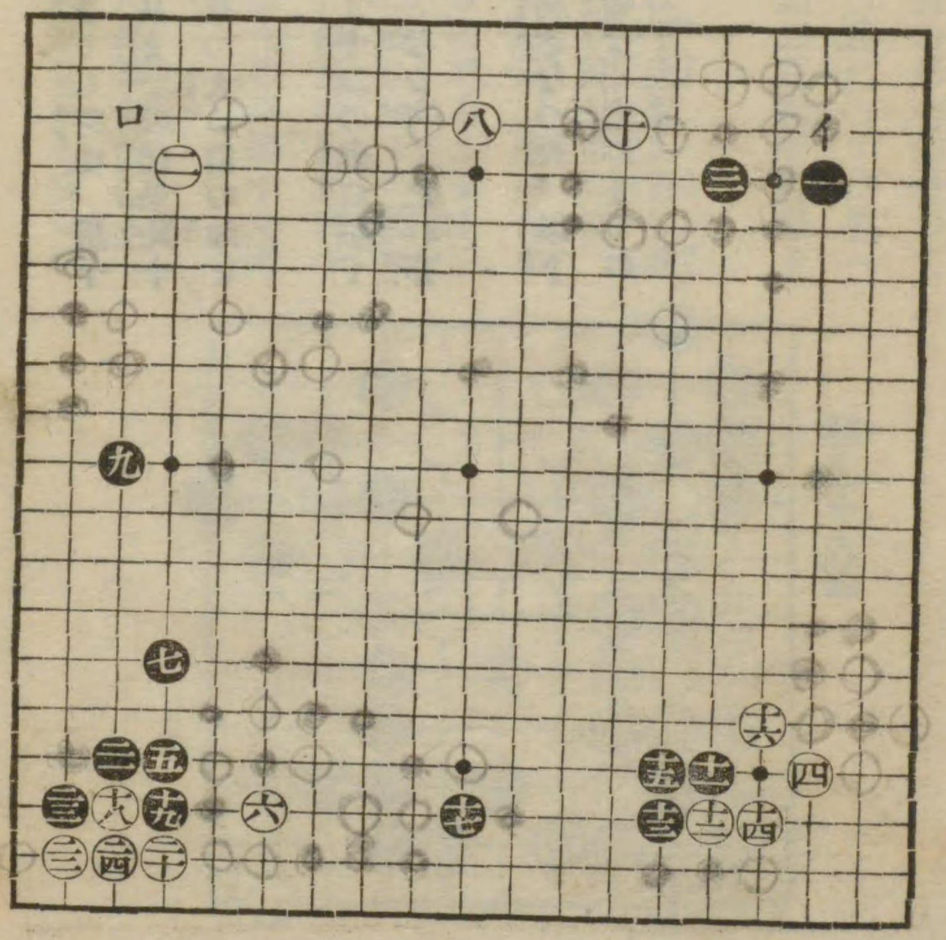
廣い盤面の打方一例

布石

前述の如く盤の廣狹丈では、其の變化又は手段に少しも異る點はないが、只中が廣い丈に黑の一、三、五或は白の二、四等の手は前の配置ではイ或はロと打つを普通としたけれども此局面では皆一路高く占領するを以て全面の釣合上好適手とします。

白六以下黑の十七まで、各々邊境三、四線に配置し、白十八に打込みし時黑十九と約へ以下白二四まで、此一隅は互角の分れとなつたのであります。

第六十圖

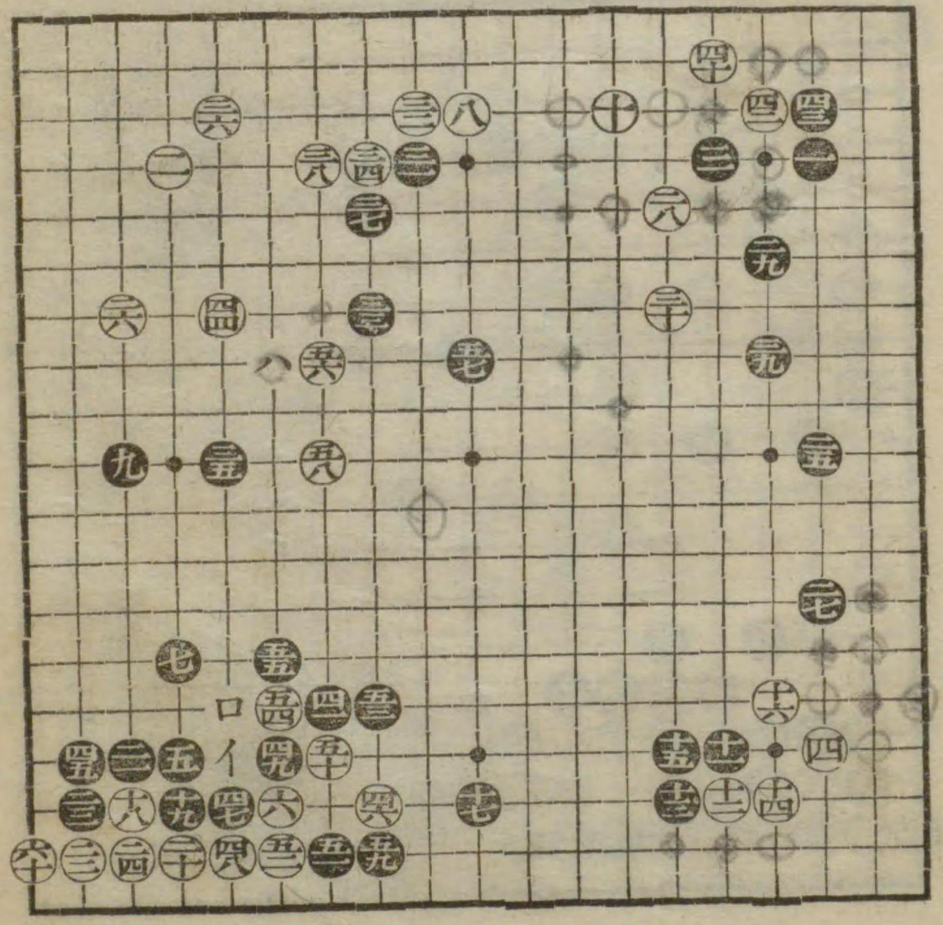


(前圖二十四の續き) 白二八、三十と打て左に形勢を張りし時黑三一と深く敵地に入り白三二の時輕く三三と打ちし黑の手段大に面白し。

黑三九と守り、白四十と斜走せし時黑四一と打て七、九方面の地を一層廣くせし手段厚壯なり、黑五一の手段好し。

白五四と切りし時黑五五の手好し、白若し五六にてイに提れば黑ロに當て、白四九の時黑八と打つべし。

第六十一圖



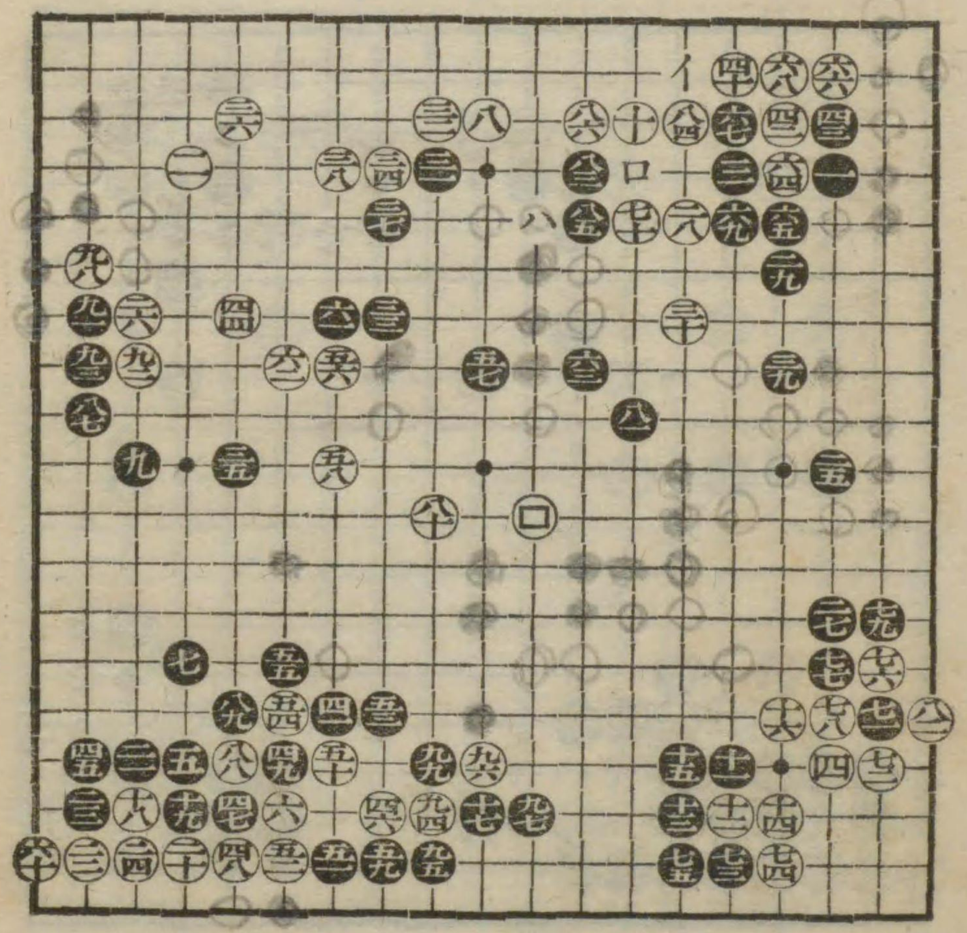
（前圖六十の續き）白七十の手にて若し八十の邊に打てば黒は八四の處に打ち、白イ黒ロ白八六黒八と打つて白の二八、三十の二子を圍むべく、斯くなりては黒の形勢宜し、黒七一以下七九と打て白の隅を狹め、且つ攻撃せし手大に宜し。

白八十と打ちし時、黒は未だ三一、三三、五七、六三等の石弱きために八一と打て之れを堅くなせり。

白百（圖中㊀は百なり）までの形黒甚だ優勢なり。

㊀四九ノ處一目ッグ

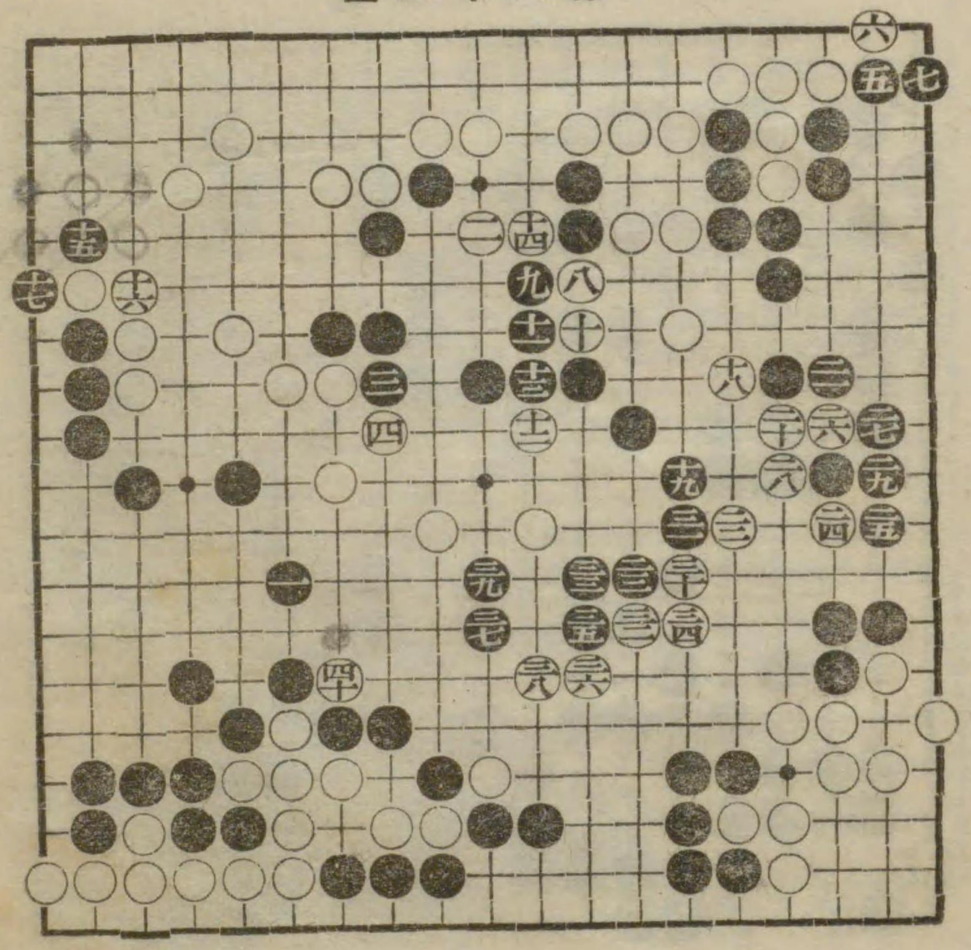
第六十二圖



戰爭

黒十五、十七と盤りし時白十八と附けて中央の黒を攻め黒十九と逃げ、白二十と綽ね、黒二一と引きし時白猶二二と攻め黒二三と逃げ、以下三九までの接杖は共に大に宜し、此結果白は下邊の模樣を消し又黒は左の石に接續する事を得たり、白四十は只黒の應手を試みしまでなり。

第六十三圖



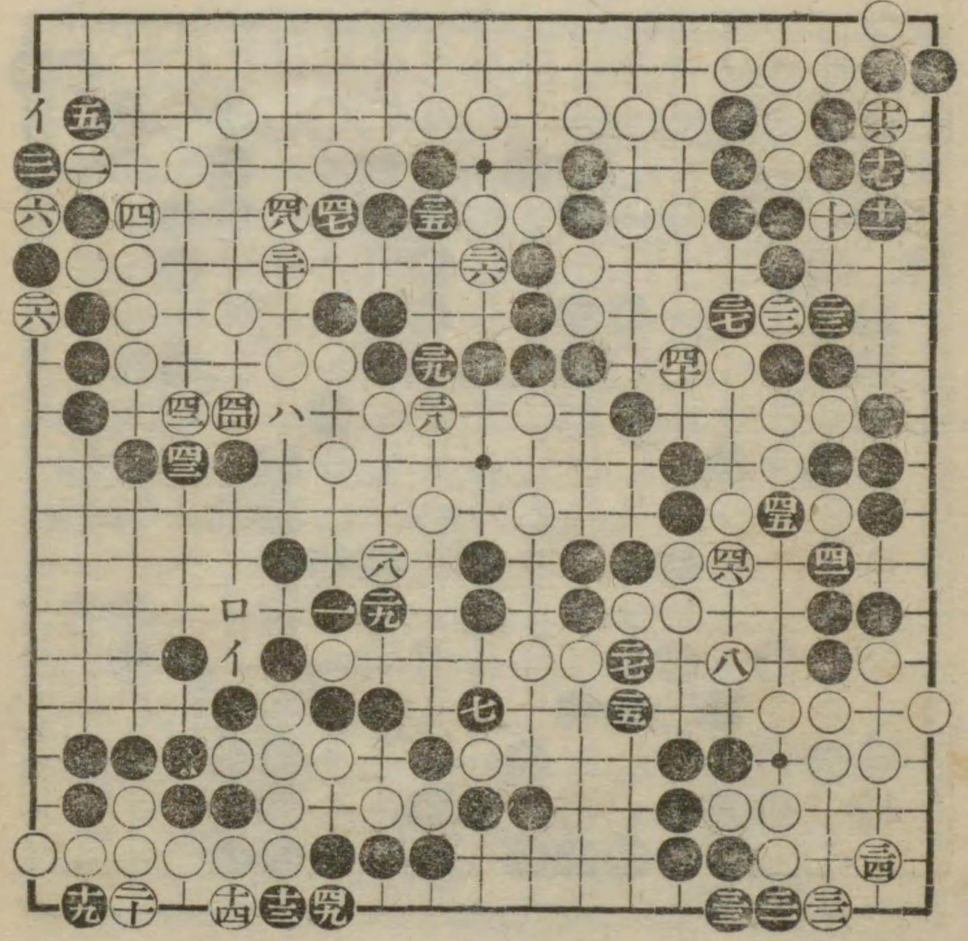
㊈劫トル　㊉同　㊊同　㊋同

㊌同　㊍同

黑五は、六の處に粘ぎ白イ黑二六と粘ぐも惡しからず、然し黑に劫拋多き故に、圖の如く五と綽ねて劫となせり、白二六の手にて二七に粘ぐ時は黑劫提り、白イ黑ロ白劫提り、黑ハと劫拋すべし、白甚だ窮すべし、黑四九の粘までにて、一局殆ど終了せり此結果は黑數子の勝確かなり。

全五圖二百四十九手迄

第十四圖



發行所　東京　大阪屋號　東京　斯文館

事務平易　恰かも先生直接より難に入る　教授と等し　組織的最新式模範棋書にして　説明の親切丁寧なる

極意式新圍碁實典　定價一、二、三、四、五、六、近刊　送料各拾六錢

初段八九目位の人が初段二三目乃有段の域に達する

教科書

科學的解釋新式圍碁實典　定價一、二、三、四、五、六、各四拾六錢　送料各六、七、各四拾六錢

何人にても初段八九目迄に至る

著者七ヶ年の努力に依り成れる

教科書上達法

一、初段實力試驗の難問題あり

旭將軍の實驗上より獲來れる定石、布石、詰物、侵分、打碁等圍碁百般に亘る棋譜に對し其利害得失を嚴密明快に細説せる斯道實力養成書

撰新圍碁全集　五版　定價壹圓參拾錢　送料壹圓　和裝美本全二冊

◎圍碁一切の科目を懇切に説明せる

旭將軍の創定せる中央の置碁に於て必勝疑無し

隅の地を活かす定石は中央の置石なれば何人も保持すべき珍書なり

隅の地を活かす定石は中央の置石なれば何人も保持すべき珍書なり

撰碁中の定石　三版　定價壹圓　送料四拾錢　和裝美本

名人本因坊秀哉氏との對戰に於て好成績を擧げ斯界を震駭せる旭將軍

軍初陣の快著にして定石の第一歩より説明せる斯界の定評書

撰新圍碁定石講話　四版　定價壹圓　送料四拾錢　和裝美本

◎速進法に依つて圍碁大要を速成せる諸氏へ

五段鈴木爲次郎先生著

186
248

大正七年八月十八日印刷
大正七年八月廿日發行

圍碁速進法棋譜付
定價金七拾錢

著者　鈴木爲次郎
發行者　濱井松之助　東京市日本橋區數寄屋町一番地
發行者　武居勝治　東京府荏原郡入新井村新井宿千三百七十九番地
印刷者　高橋赤次郎　東京市京橋區新榮町四丁目三番地

發行所　東京市日本橋區數寄屋町一番地　大阪屋號
振替東京一三七五番
東京市神田區南神保町九番地　模範棋書發行所　斯文館
振替東京二七二三番

不許漢譯

名人本因坊秀哉師謹評
舊幕府御秘藏碁戰　送定價入六拾五錢
名人本因坊秀榮、同秀哉、岩崎準名人
中川方圓社長棋伯講評
朝報社版藏　現名家今碁戰　送料一、二各壹十錢圓
中川方圓社長著
五版互圖先碁布石攻合法　送二册壹入圓四錢錢
新刊互圖先碁布陣挑戰法　送二册壹入圓廿錢錢
中川、岩佐合計十三段著
再版互置先碁定石新法　送金壹入錢圓
六段雁金準一先生著
三版攻布石合置碁必勝法　送二册壹入圓廿錢錢
五段野澤竹朝先生著
三版打碁と要領　送二册壹入圓卅錢錢
新刊定創大斜定石　大斜附古今名家實戰　送三册壹圓十二八拾錢錢
五段瀨越憲作先生著
三版圍碁襲擊戰法　送金六四拾錢錢
新刊圍碁實力養成法　送金七四拾錢錢
四段高橋清致先生著
再版圍碁勝敗此の一手　送金六四拾錢錢
發行所　東京大阪屋號　東京斯文館